奈良教育大学
国際交流留学センター主催 シンポジウム
平成29年度学長裁量経費プロジェクト

教員養成大学における グローバル人材育成 を考える

報告書

巻頭言

プロジェクト代表
国際交流留学センター　和泉元千春

昨今の学校教育現場を取り巻く社会的背景の変化は、教員に求められる資質・能力にも大きな影響を与えています。その一つに学校教育現場の多言語化・多文化化という問題があります。いわゆる外国にルーツを持つ児童生徒及びその保護者への対応は今や特定の地域の教員に限定された課題ではなくなってきました。奈良県は外国にルーツをもつ児童生徒が県内各所に分散している地域であるため、現実の問題として顕在化しにくいと言えますが、その数は年々増加の一途をたどっています。また、学校教育における外国語教育や異文化理解教育の変化も、教員に求められる能力への影響を考える上で看過できないものです。このように学校教育現場のグローバル化、多文化化に対応するため、グローバルな視点を持った教員の養成は教員養成大学にとって重要な課題だと言えますが、実際には、学生の内向き気質と異文化経験の不足、異文化理解教育の現場体験に対するリアリティのなさが問題となっています。それは、大学の国際化志向の影響で受け入れ留学生が増加しているにも関わらず、キャンパス内での国内学生との交流が依然として限定的である現状にも表れているでしょう。

そこで、今年度の本プロジェクトでは、「ことば」を鍵として、「グローバル人材」育成において重要な異文化間能力や多文化共生意識の涵養にはどのような態度や技能が必要なのかを具体的に考えてみることとしました。講演では、「生活者としての外国人」に対する情報保障の一つのあり方である「やさしい日本語」を取り上げ、京都外国語大学外国語学部日本語学科教授　森篤嗣氏に多文化共生社会に必要な言語技能や歩み寄りの態度について学校教育現場での教師の態度や技能と関連付けながらお話をいただきました。またワークショップでは、目白大学人間学部児童教育学科専任講師　横田和子氏をファシリテーターとしてお迎えし、留学生も含めた多様な背景を持つ他者とともに詩を創作する活動を通して、不完全な理解の中での協働で引き出されることばの力を体験しました。

学校教育の場で「グローバル人材育成」を担う教員自身には、グローバルな多文化社会に生きているという当事者意識が必要なことは言うまでもありません。他者に関心をもちつつ、自己のことばを伝え、他者の声を聞くという態度はその当事者意識を支えるものなのではないでしょうか。

2018 年 3 月

奈良教育大学　国際交流留学センター主催　シンポジウム
平成 29 年度学長裁量経費プロジェクト
教員養成大学における「グローバル人材」育成のためのカリキュラムに関する総合的研究

シンポジウム「教員養成大学におけるグローバル人材育成を考える」

目　　次

講演記録：「やさしい日本語」と学校教育 …… 1
森　篤嗣（京都外国語大学外国語学部日本語学科　教授）

当日配布資料
［第一部］講演「やさしい日本語」と学校教育 …… 24
［第二部］ワークショップ資料 …… 33
シンポジウム進行用投影資料 …… 36

参加者のコメント
［第一部］参加者の感想と講師（森篤嗣氏）からのコメント …… 38
［第二部］参加者の感想とファシリテーター（横田和子氏）からのコメント …… 40

講演・シンポジウム全体の感想 …… 48

参加者の作品 …… 50

シンポジウム広報用ポスター …… 77

▼プロジェクト名

学長裁量経費プロジェクト「教員養成大学における『グローバル人材』育成のためのカリキュラムに関する総合的研究」

▼プロジェクトメンバー

和泉元千春	国際交流留学センター　准教授
櫻井綾	本学附属小学校　教諭
佐古田康義	本学附属中学校　教諭
渋谷真樹	学校教育講座　教授・国際交流留学センター長
竹内範子	本学附属幼稚園　副園長
頓宮勝	国際交流留学センター　特任教授
中谷いずみ	国語教育講座　准教授
橋崎頼子	学校教育講座　准教授
横山真貴子	学校教育講座　教授
吉村雅仁	教職大学院　教授・教職大学院長

▼プロジェクト概要

本プロジェクトは、グローバル化に対応した人材育成が求められる昨今の情勢に鑑み、教員養成大学としての「グローバル人材」の在り方とその育成に関して研究を行うことを目的としている。プロジェクトでの成果概要は以下の通りである。

平成 26 年度

本学既存の教育学部科目と留学生向け科目、本学附属校（附属小学校、附属中学校）での異文化理解にかかる教育（国際理解教育など）の連動等によって、本学学生のグローバル意識の醸成を試み、それらの実践の成果を「ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（口頭発表）」、『奈良教育大学次世代教員養成センター紀要』等に発表した。さらに、ストラスブール大学教職大学院教授アンドレア・ヤング氏（バイリンガル教育、多言語複言語教育）を訪問し情報収集を行った。

平成 27 年度

以下のシンポジウムを通して「グローバル人材」とその育成を教員養成大学の文脈で捉え直すことの必要性とその方向性を確認した。

＜第１回＞

講演：「グローバル人材」になる―言語文化教育の個と社会の立場から―（早稲田大学名誉教授、言語文化教育研究所八ヶ岳アカデメイア主宰　細川英雄氏）

実践報告①：奈良教育大学における留学生教育と連動した言語文化教育の実践（和泉元千春・岩坂泰子）

実践報告②：奈良教育大学附属小学校「言語・文化」の実践（林綾・岩坂泰子）

＜第２回＞

講演：グローバル時代の教員養成の課題 -「異文化間能力」育成の視点から-（目白大学学長　佐藤郡衛氏）

実践報告①：ＥＳＤの視点に基づいた道徳性育成の授業実践（小嶋祐伺郎）

実践報告②：「異文化間能力」を育む教員養成－博物館における校外学習をめぐって（渋谷真樹）

平成28年度

以下のシンポジウムを通して、「グローバル人材」というテーマをより具体的に学校教育現場での問題に落とし込んで考えた。

＜第１回＞

講演：「多文化教員」に求められる資質・能力―多様な言語文化背景の子どもたちの学びの場をデザインするために（東京学芸大学教育学部教授　齋藤ひろみ氏）

実践報告①奈良市における日本語指導が必要な児童生徒の現状（奈良市教育委員会学校教育課教育推進係　日本語指導コーディネーター　吉村瑞希氏）

実践報告②：子どもたちの世界を広げる附属小学校における「言語文化」の教育実践（和泉元千春・岩坂泰子・林綾）

＜第２回＞

講演：新しい教育課程と学びのイノベーション－コンピテンシーを育む学びのデザインと教師の育成－（国立教育政策研究所・初等中等教育研究部・総括研究官　松尾知明）

実践報告①：地球市民意識の形成と道徳教育―ボーダー（境界）を考えることから他者とのつながりを実感する実践を通して―（小嶋祐伺郎）

実践報告②：グローバル時代の市民性を育てる教員養成―教員志望学生と留学生の交流授業から―（東京学芸大学教育学部准教授　南浦涼介）

上記の実践、研究成果を踏まえて、今年度（平成 29 年度）は以下の通りシンポジウムを開催した。

日時：2017 年 12 月 9 日（土）13：30-17：00

場所：本学大会議室

参加者：第一部　85 名　第二部　70 名

内容：［第一部］　講演：「やさしい日本語」と学校教育

（京都外国語大学外国語学部日本語学科教授　森篤嗣氏）

［第二部］　ワークショップ「インタビュー詩を創ろう」

（ファシリテータ：横田和子（目白大学）・和泉元千春）

後援：奈良県教育委員会、奈良市教育委員会

講演記録：「やさしい日本語」と学校教育

森篤嗣氏（京都外国語大学　外国語学部日本語学科　教授）

森篤嗣氏（以下、森氏）：それでは、はじめさせていただきたいと思います。京都外国語大学外国語学部日本語学科、森篤嗣と申します。よろしくお願いいたします。

本日の講演自体は「『やさしい日本語』と学校教育」というタイトルをいただいたんですけど、その前に、今日のシンポジウムのタイトルである「教員養成大学におけるグローバル人材育成を考える」と、「やさしい日本語」というのがどういうふうに関係するのかということを少しでも説明できたらなぁと思います。

私自身、教員養成大学の出身で、小学校教員免許を持っております。もともと、小学校の教員になるつもりだったのですが、教員採用試験に合格しなかったので、大学院でも行こうかなぁと思っているうちに、いつの間にか研究をしていたという感じです。ですので、奈良教育大学の皆さんとは、同じ出身というか、同じ系統と思ってもらったらいいと思います。

もともとは、小学校教員を目指して勉強していて、国語教育が専門だったのですが、そのあと、大学院以降では、日本語学、日本語教育を勉強しました。外国人に対する日本語教育というのをいろいろやってみて、私自身がいちばん感じたことは、外国人に対する日本語教育の方法というのは、実は学校の先生たちもいろいろ考えたらいいことなのではないかということです。その逆に、日本語教育というのはそんなに知られていません。やはり学校教育とかその他、いろいろ社会に対する情報開示みたいなところで、もう少し日本語教育もできることがあるのではないかということを思います。もともとは小学校教員というか学校教育をやっていた人間が日本語教育の世界であれこれ研究や教育をやっているうちに、国語教育と日本語教育をもう少し結び付けていけないかなと思い、ずっと考えてきました。

私自身は、大阪外国語大学の大学院を卒業したあとに、タイのバンコクで日本語の先生をしてみたり、東京の女子大の助手をしてみたり、そのあと、国立国語研究所で日本語教育のグループ研究というか、全国調査みたいなことをやってみたり、帝塚山大学という奈良にある大学で、小学校の国語の先生になる人に国語科教育を教えてみたりと、今まで日本語教育と国語教育両方を自分のプロパーとして教えてきました。「やさしい日本語」というと、日本語教育の文脈で語られることが多いのですが、特に「やさしい日本語」の観点・観念は教育だけの問題ではなくて、地域社会とか社会との接点ということが大きい問題だと思います。学校教員を目指している学生の方が多いと思うのですが、そういう観点から「やさしい日本語」を考えてみると、学校教育の文脈であっても学校教育とか学校教員という場面だけではなくて、もう少し広い視野で言葉を見るということは、日本国内にあってもグローバルだ、グローバルな人材だということになるのだと思います。英語だけがグローバルな人材育成ではないと私自身は思っております。

「やさしい日本語」とは

「やさしい日本語」なんですが、英語に訳したときに、普通に訳すと　Easy Japanese です。けれども、必ずしも Easy Japanese ではありません。どちらかと言うと、Plain Japanese に近いと考えてもらった方が良いと思います。英語では、実際 Plain English とか Globish というような研究がなされています。ある調査で明らかになったのですが、例えばアメリカ国内で交わされているコミュニケーションの 75%は非母語話者が関わるコミュニケーションであるそうです。つまり、母語話者同士がしゃべっているのは 25%しかない。それぐらい、非母語話者が多いアメリカという国で、できるだけ、誰にでもわかる共通の言葉を作っていこうということです。この意味で考えたときに Easy English ではなくて、Plain English となります。決して簡単なわけではないのですが、無駄な飾りを取っ払って、非母語話者でも母語話者でもみんなが意思疎通できる言語を作っていこうということが、そもそも Plain English の思想です。「やさしい日本語」というのは Plain Japanese だと思っていただいたらいいので、いわゆる、母語話者と非母語話者のコミュニケーションです。もうちょっと言うと、小学校の先生が子どもたちに話す言葉は基本的に Plain Japanese であるべきだろうということですね。これは、国語科の指導法だけでありません。各教科の指導法をやっている時に、わかりやすく説明しなさいと言われたことが何回もありますよね。わかりやすいとは、結局どういうことなのかということです。結局、「やさしい日本語」を考えるのも、このことを考える一つのきっかけになるのではないかなと思います。

日本の場合、「やさしい日本語」の話を我々が一生懸命やっているのは、特に地域の日本語教育に関する問題からです。今ここにも外国人の方が多くいらっしゃいますが、ここにいらっしゃる外国人の方は、おそらく留学生が多いだろうと思います。大学生、大学院生、どちらもですね。皆さんのように大学に通っていると、外国人イコール留学生というふうに思ってしまうかもしれないんですが、日本に在留する外国人のうち、留学生が占める割合というのは、それほど多いわけではありません。それこそ、10%とか 15%とか、その程度です。そう考えると、実は日本社会の中にも留学生ではない外国人の人がたくさんいて、その人たちに対してどのように日本語を教えるか、というと失礼な言い方かもしれませんが、何らかの協力はできないのかということは、日本語教育の課題でもあるわけです。しかし、これまで日本語教育においては、基本的に留学生相手の日本語教育がメインでした。これは仕方ないことです。例えば、日本語教育学会という、私も所属している学会があるのですが、日本語教育学会にいる日本語教育の研究者の研究対象はほとんど留学生の日本語教育なんですね。日本語教育学会にいる研究者はみんな大学の先生で、大学の先生にとって教えないといけないのは留学生であるという、これは非常に当たり前の循環になりますよね。

例えば、日本語教育でものすごくメジャーで、世界中、日本中で日本語を勉強する外国人の人だったら一度は目にしたことがある『みんなの日本語』という教科書があります。この『みんなの日本語』というのは、典型的な留学生向けの教科書です。悪い教科書ではありません。すばらしい教科書だと思うのですけが、留学生が勉強することに完全に特化した教科書なんですね。このことをどれぐらい日本語教育の関係者の人たち

がきちんと意識しているでしょうか。みんなわかっているのです。わかっているのですが、ついつい「とりあえず、『みんなの日本語』からいこうか」みたいになってしまうところがあるのですね。そこで私たちは、『みんなの日本語』はすばらしいのだけれども留学生向けだから、地域ボランティア教室で使える教科書を作ろうということで、『にほんごこれだけ！』という教科書を作りました。その『にほんごこれだけ！』という教科書を作るときの下敷きになったのが「やさしい日本語」という考え方だということになります。留学生ではない外国人の人たちに日本語を教えるときに、その日本語というのはどういうものであるのか。すごく簡単に言ってしまうと、留学生の日本語教育というのは、最終的にはアカデミックにつながらないといけないんです。大学に入学して卒業しないといけませんから、留学生の教育というのは基本的に初級レベルから積み上げていってアカデミックを目指すわけです。しかし、地域にいる外国人の方々というのは、必ずしも、全員が大学入学を目指しているわけではない。もっと言うと、そういう人はごく稀にしかいないわけです。日本という国で生活を円滑に進めていくだけの日本語が身につけばいいということで、そもそも教育の目的・目標が違うということになります。それが地域型日本語教育の特徴で、「やさしい日本語」の話と地域型日本語教育の話とはセットになっていると考えてもらったらいいと思います。

必要最小限の文法項目と語彙からなるような文法シラバスというのが、我々が考えた「やさしい日本語」の基本ということになります。実は、我々より先に「やさしい日本語」の研究をしている弘前大学の佐藤和之先生という有名な先生がいらっしゃるのですが、この佐藤先生の考えている「やさしい日本語」というのは災害が起こったときのためのものです。一番最初は、阪神淡路大震災のときに外国人の方々が情報を求めたとき非常に困ったというような経緯があったということです。実は英語で流しても、必ずしも外国人の人が全員、英語がわかるとは限りません。そう考えると、日本在住者であれば日本語で流したほうが、しかも複雑な日本語ではなく、わかりやすい日本語で緊急情報を流したほうが救われる人が多いのではないかという考え方に基づいて、始められたのが佐藤先生たちの研究です。これはこれで、非常に重要な研究なのですが、私たちはどちらかというと、地域日本語教育ということを出発点にしていますので、災害時ではなく、平常時、普段から地域に住んでいる留学生ではない外国人の方々をサポートする方法に、どんな方法があるのかを考えていました。我々のグループは一橋大学の庵功雄さんという人をトップにして科学研究費でずっとやっていたのですが、この一橋グループの研究は、どちらかというと平常時、特に外国の人が市役所に行ったときの手続きでとても困るといった問題をどうするかとか、そういった問題を特に扱っています。

これは、庵氏の持論で、私自身はここまで強く思っているわけではないのですが、「やさしい日本語」というのは、補償教育の対象としての側面と言えます。つまり、日本に来ていただく外国の方々には完璧にすべての出来事、例えば役所からの通達であるとか、生活のためのサポートみたいなものすべてを母語で提供することができるというのがベストです。ただ、その場合は非常に膨大なコストがかかってしまいますし、どの言語にするのかというのも問題になります。英語でやりましょう、ということになった

ら、英語だけじゃだめだから、中国語もやりましょうとなる。いやいや、それなら、韓国語もやってください、いやいや、それなら、タイ語もインドネシア語も頼みます、みたいな感じになってくると、いくらやっても最終的に100%にはならないですよね。従って、「やさしい日本語」には補償教育としての側面があって、多言語でサポートができなくて申し訳ないので、少なくとも日本語に関しては、留学生じゃなくても、いろいろな地域等で日本語を学びたいと自分から思ってくれる外国人の方々には学ぶ場をちゃんと提供しましょうと、それが日本という国がすべきことだというような考え方に基づいています。現状どうなっているかというと、結局、地域日本語教育というのは、90%が善意のボランティアの人たちによって支えられています。このボランティアの担い手はいろんな人がいますけど、多いのは学生の皆さん、それから主婦の皆さん、それから定年退職をした皆さんです。だいたいこの 3 種類のいずれかの方々が、地域で寄り集まって、ボランティアとして外国人の方々に日本語を教えるというか、一緒に学ぶというか、そういうふうな地域ボランティア教室というものが、日本中、あちこちにあります。私たちは、北海道から沖縄まで300ヶ所ぐらい『にほんごこれだけ！』の使い方の講演に行きました。その話をちょっとしていきたいと思います。

「やさしい日本語」が必要なわけ

まず、「やさしい日本語」がどうして必要かということは今までも申し上げました。まず、定住外国人ですね、留学生ではない生活者としての外国人の方が増加し続けている。生活者としての外国人の定義はとても難しいのですが、まず、基本的には日本で生活するということがメインであって、日本に日本語を勉強しに来たというわけではない人と思ってもらったらいいと思います。例えば、最近増えているのはプログラマーやSE といったIT企業の社員として、日本にやってくる人です。インドの方とかが多いんですけど、このような人たちが結構います。この方々は、たいてい会社ではオール英語でいけるんですね。こういった、例えば、会社で英語だけでOKな人でも、「日常生活で日本語ができたら、もうちょっといいことあるんじゃないかな、でもなかなか時間もない、市役所とか市民センターで月1回とか週1回とか、なにか講座やってるみたいだからちょっと顔を出してみようかな」みたいな感じの人がいわゆる生活者としての外国人、つまり地域日本語教育に入ってくる人たちです。この人たちは日本にいるからといって、必ずしも日本語を話す機会がそう多くあるわけではありません。いちばん典型的なのはコンビニとかスーパーとかですよね。別にコンビニとかスーパーは言葉をひとこともしゃべらなくてもOKですよね。そういうふうに考えると、結局、日本語をしゃべる機会ということを地域日本語教室の中でだけでも与えるということは、すごく意味があることです。地域の日本語教室に行きまして、いろんな方にいろんな質問をいただきます。その中で多いものは、学生のみなさんもそうですし、主婦の方も、定年された方も、みんながおっしゃることなのですが、「おしゃべりだけで意味があるのか」「話し相手になっているだけで、本当にいいのか」ということです。このあたりはもちろん我々が理論を考えないといけないことですが、実はこれは結構重要なことだったりします。学生の皆さんもそうです。日本語教育の専門知識とか全くいりませんから、

手伝いに行ってみてください。先ほど、「おしゃべりするだけ」と言いましたが、外国人がそこにいるからといって、そのおしゃべりに付き合う人、道端でいきなりおしゃべりに付き合うような日本人がたくさんいるかといえば、そんなの絶対にいないですよね。例えば、奈良市でも大阪でも、外国人の方を見かけたことがあると思いますけど、わざわざ立ち止まって話しますか？しないですよね？目的もないのに。そうすると、話す機会を与える、提供するというだけで、地域日本語教室というのは機能しているのだと言えます。

もう一つ、先ほども言ったように、なぜ日本語なのかということについては、多言語化で済まない問題があるということです。これは岩田一成さんという私の研究のリーダーが調査をしました。いわゆる日本在住の外国人の方で、英語がわかる方はもちろん多いです。しかし、実際調べてみると、英語より日本語のほうが得意だという人のほうが多いということです。もちろん、英語もできる人はできますが、一般的に考えると必ずしも日本に英語圏の外国人が多いわけではありません。日本に住んでいる年数が長い場合は英語より日本語の方がよくわかるというような方が多いのです。でも、公的な文書は難しい。だから、「やさしい日本語」にしましょうということです。また、多言語化の限界ということと日本語ということをどう考えていくのか。完全な多言語化ができないということに対する補償教育、初期日本語教育の公的保障としての「やさしい日本語」です。この「やさしい日本語」というのは、単に理念だけを上げているだけではだめなので、実際に『にほんごこれだけ！』のような教科書・教材を使って地域の日本語教室で展開をすると、少しでも日本語が普段から話せるようになるのではないか、それが留学生以外の一般的な定住外国人の手助けになるのではないかという考え方の基になっています。

「やさしい日本語」が目指すもの（１）
外国人だけに日本語を押しつけない、寄り添いあう地域の社会像

「やさしい日本語」では、外国人だけに日本語習得を押し付けないという考え方がものすごく重要です。例えば、わかりやすい喋り方とかわかりにくい喋り方、読みにくい文章、読みやすい文章というのは母語話者でもたくさんあると思います。しかし、基本的に読みやすい文章やわかりやすい言葉で話しかけなかった人はすべてシャットアウトします、という態度ではいけないのだということです。これは、実は外国人だけではなく、日本人でもそうじゃないかと思うんです。小学校教員、幼稚園教員、目指されている方が今日はたくさんいらっしゃいますが、小学校教員を目指すにあたって、特に低学年で、「この子のしゃべり方、わかりにくい。何言うてるかようわからへんから、先生は話、聞きません」と言わないですよね。「どうしたんかな？なんとかっていうこと言いたいのかな？それって、〇〇ってことかな？」といったティーチャートーク的なものを実習でやったことがあるのではないかと思います。ただ、外国人は成人なので、子ども扱いするというのだけは、絶対やめてほしいですけど。皆さんも、外国に行った時、相手が親切に「うんうん」って聞いてくれて、「それって、〇〇？」と言うと、「そうそう、それそれ」みたい通じたら、嬉しいですよね。これは、全世界、共通だと思うので

す。特に、日本という国において、外国人に合わせて、英語をしゃべりましょうということだけがグローバルではないと思います。外国人は日本に来ていらっしゃるわけですから、できるだけ、日本語で対応するという道もあっていいはずです。ただし、その日本語で対応するときに、ちゃんとゆっくりわかるように話を聞く、話をする、まさに「やさしい日本語」です。そういった心がけがあれば、例えば、去年にここのシンポジウムでやった、外国人児童生徒の問題というのも、一部解決するでしょうし、地域の外国人の方とどのように話していけばいいのかという問題にも、ひとつ、コミットしていくのだと思います。実は小学校教員を目指す皆さんが子どもたちにわかりやすく話すということも、突き詰めれば、これとほとんど同じだということなんですね。「やさしい日本語」には、基本的に語彙統制、難しい言葉を使わないという考え方がありますが、本来、教育の場では、難しい言葉をゼロにしたら教育がよくなるわけではありません。例えば、「このように二つの出来事を比較検討することによって」と言ったとき、相手がわからないという顔をしていたら、「あっ、わかりませんか？比較は、比べるということです。検討は、考えることです。比べて考えること、比較検討です。」と言うと、「あぁ、なるほど、わかりました。」となります。小学生でも同じことだと思うのです。難しい言葉を避けるのが、「やさしい日本語」ではありません。きちんと相手と交渉すること、コミュニケーションすることがすごく重要で、まさにその相手が本当にわかっているかどうかという事の感触を掴みながら、きちんと話をするという、非常に当たり前の事なのですが、ボランティア教室の人たちにお話しています。従って、外国人の日本語ゼロビギナーの方が、例えば『にほんごこれだけ！１』を週１回勉強して半年ぐらいで終わって、『にほんごこれだけ！２』が半年ぐらいで終わる、合計１年ぐらいで終わるというのをイメージしています。だいたい、１つの本が20課ぐらいありますので、だいたい、半年で 20 回です。52 週ありますが、休みがありますから。それがいわゆる、ミニマムの文法と語彙の習得ということになります。また、日本語母語話者のほうは、当然ながら、今言ったように、文法や語彙というのは制限していく、ただ、全部使わないわけではなくて、ちゃんと伝わっているかどうかを探りながら、制限をして言ったり、わかりやすく説明をしたりします。日本語から日本語への翻訳、これがまさにさっき言った「比較検討」から「比べて考える」へという日本語から日本語への翻訳です。

「やさしい日本語」が目指すもの（２）
外国人だけに対する教育ではなく、日本人に対する教育でもある

このように、外国人側に「やさしい日本語」を学んでもらう一方、「やさしい日本語」は日本人に対する教育の側面が強くあります。日本人側にも「やさしい日本語」というものがどういうものかわかってもらう必要があります。

ただ、この話をするときによく勘違いを受けるのが 2 つ目の項目になります。外国人に「やさしい日本語」を教えるということは、外国人の人たちに教える項目を制限する、もしくは能力の上限をつけてしまうということであって、外国人の人をバカにしているという批判をされることがあります。でも、これはここに書いてあるように、すべての外国人の方々が日本で生活する上で円滑にコミュニケーションをとっていくうえ

で、最低限必要な日本語をまずは目指そうと言っているだけであって、そこで終わらなければならない、それ以上やる必要はないということを主張しているわけではありません。そこから、もともと働きに来たのだが、日本で生活しているうちに、大学にも行って勉強したいと思うようになった、といったら、そのような手助けが必要だと思います。でも、すべての人が最初から文法積み上げ方式でアカデミックジャパニーズにつながるような日本語を必要としているとは限らない、教育には目標や目的が重要であるということをここでは言っています。

日本語ボランティアの役割

先ほど言った、日本語ボランティアですが、この日本語ボランティアの役割をもう一度考え直すということがとても重要だと思います。たまに地域日本語教室で、私は「教えるわけではないんですよ、手伝いですよ、市民同士の助け合い活動ですよ」ということをよく言います。ですので、日本語教師ではなくて、日本語ボランティアという言葉にこだわるのですが。英語でボランティアというのは、別にタダだということを表してはいません。ボランティアの基本的な理念というのは、労働とか労力を提供するという意味であって、別に有償でも無償でもいいのです。だから、日本語ボランティアも有償でも無償でもいいのですが、ボランティアである以上、参加できる人ができる範囲のことを提供すればいいのだという考え方です。専門性を問う、問わないということの差で、私はボランティアと教師を分けて考えています。特に教員養成大学にいる皆さんが今取ろうとしているものが、まさに国、都道府県から出される教員免許と言われる専門性の証ですよね。この教員免許があるから皆さんは教師として活躍できる道が切り開かれているわけで、これは完全に専門性に基づく仕事です。幼稚園教諭、小学校教員、中学校・高校教諭は専門性に基づく仕事です。日本語の教師はそこまで明確な資格があるわけではないですが、主専攻、副専攻、日本語教育能力検定試験など一応資格みたいなものがあります。だから、私は教師に対しては基本的には厳しく専門性を問うべきであるし、教師というのは責任を持つべきであるとは思います。その代わり、教師はちゃんとお金をもらうべきであると思います。

一方、ボランティアはほとんど無償の方が多いのに、無償だけど責任だけは持てと言われています。これはおかしい。専門性を問う必要は全然ありません。多文化共生社会という言い方があります。いろいろなところで言われているのですが、多文化共生社会というのは、深く狭くよりも広く浅くとやらなければいけない。だから、ボランティア教室に行った時にいつも「皆さんは頑張ってやっていらっしゃる」と言います。「ただ皆さんだけで狭く深くやっても結局、多文化共生社会にならない」とも言います。「もし、皆さんが多文化共生の輪を広げたい、もしくは外国人みなさんのサポートをやっていきたいと思うのであったら、外国人に対して何かをすることよりも家族に今、自分がやっていることを伝えてください」と言います。私も子どもに「外国人の人たちにこのような仕事をしているんだよ」という話をよくするようにしています。家族に伝えていって広げていかないと、結局、いつも決まった特定の人たちだけが頑張って外国人のサポートをしている状態になります。一週間は 168 時間あります。168 時間のうち 2 時

間だけを必死でサポートしても残りの 166 時間はサポートできません。残りの 166 時間に関しては社会の人たちに支えてもらわないといけないわけです。そう考えるとむしろ、多文化共生社会を作るということは、外国人たちのサポートの仕方ばかりを一生懸命考えるということよりも、自分たちがやっている活動を多くの人にできるだけ理解してもらう活動が重要だと思います。これって実は学校教育にも通じるかなと思うのです。学校の先生はどうしても学校という世界の中で留まってしまうことが多いのですが、学校教育でやっていることを色々な人たちに伝えていかないと学校教育は良くなっていかないんのだと思うのです。皆さんの中で教育実習に行った方はわかったと思いますが、10 年前自分が受けた小学校教育と現代の小学校教育はだいぶ変わってますよね。なのに、世間一般の人たちは自分が受けた小学校教育をイメージして「小学校教育は全然なってない」みたいなことをすぐ言ってしまいます。だから、その意味で言うと、日本語ボランティアの世界も同じです。日本人に伝えていかないといけない。学校教育を良くする方法も、ほとんどの先生が「学校教育はどうやったら良くなりますか。」という問いに対して、「子どもへの教育を熱心にやることです。」とおっしゃいます。その通りです。その通りなんですが、それだけでは学校教育は良くならない。学校教育を良くするには皆さんが頑張ってやっている教育活動がいかに工夫されて変わってきて、意味があるものとしてどういう風に変容しているかを普通の日本人に広めていかないといけません。何でも一緒ですよね。というわけで深く狭くやってはいけません。広く浅くやりましょう。これは、学校教育もそうだし、ボランティアもそうです。外国人の支援ではなくて、日本人への働きかけということが極めて重要だという話です。従ってボランティア活動参加への垣根を限りなく低くしましょう、ということをボランティア教室に行くと必ず言うようにしてます。ボランティアの主催者の方が「私たちずっと継続して行っているんだけど、学生さんは来てくれてもすぐに来なくなってしまうし、ちょっと続けてくれるようになったかなと思っても卒業したらやっぱり忙しくなってきてくれない」と言います。ボランティアへの参加が非常に一時的であるということです。「それではなかなかうまく一緒にやっていけないんだ」みたいな悩みを聞くことがあります。気持ちはとてもよくわかります。ボランティア教室に一回だけ来て、そのまま二度と来なくなる人に対してものすごく悪印象を持っているかもしれませんが、実はさっきの広く浅くの話で言うと、大成功ですよ、というわけです。皆さんも経験あるかどうか分かりませんが、まず、その場所に一回でも行こうと思うだけでかなり協力的な人なのです。もしその人が学生さんとかその他主婦の方でも、一回だけ参加してみて、「ああこんなに大変そうなんだなぁ、なかなか難しいんだなぁ、ちょっと私にはできそうにないな」と思って、次から申し訳ないけど行くのをやめようとなっても大成功なのです。その方はおそらく、自分はあそこまではできないけど、少なくとも、街中で外国人の人に会った時には何らかの形で優しくしていこう、ちゃんと対応していこうと思えるからです。その意味では、ボランティア教室に来る一見さんがいるということに腹を立てている人がたくさんいるのですが、一見さんがいるということは多文化共生社会を作る「広く浅く運動」でいうと大成功だと思います。学校教員になる皆さんにも同じようなことを言っておきますね。世の中のお父さんお母さんの学校教育

のイメージは 30 年前のまま止まっています。しかし、皆さんが唯一そのような一般の日本人の父兄、保護者の方々に対して、今の小学校教育を見せられるのが参観日です。お母さんやお父さんから見張られているのではなくて、お母さんやお父さんに今の小学校教育を知ってもらうぐらいのつもりでやってもらうと非常にいいんじゃないかなと個人的には思います。

日本語ボランティアの人たちによく「じゃあ、文法の勉強をしなくていいのは分かりました。教授法の勉強も別に要らないと森先生は言います。じゃあ何をしたらいいんですか」と聞かれます。その場合は、「あなた方は、二つ長所を持っていますから、それを使ってください」と言います。それは何かと言うと、まず一つは母語直観です。日本語母語話者である以上、日本語でよく言うかよく言わないか、自然か不自然かは理由が説明できなくてもだいたい言えます。このことを母語直観というのですが、母語直観は非常に重要なものです。例えば、教科書に載っている日本語を崇拝してしまうと、変な日本語というのが結構生まれてきます。しかし、実は皆さんに外国人の方々に伝えてほしい日本語というのは、正しい日本語ではなく、生きた日本語、ふさわしい日本語なのです。だから皆さんがそういう言い方をするのかしないのかということを、皆さん自身が考えた範囲でやってもらうといいわけです。外国人の人たちに「日本人はお正月の時には何と挨拶をしますか。」と聞かれました。「あけましておめでとうございます、です。」「ああそうですか。大学生の皆さんでも言いますか。」「ん？あけましておめでとうございます……。友達が来て、あけましておめでとうございます……。ちょっと変やなぁ……。」「あんまり言いません。」「あれ、言わないんですか。じゃあ、何て言うんですか。」「あけおめ。」「あけおめですか。」「あけましておめでとうの“あけ”と“おめ”です。」「ああ、なるほど、あけおめですね。あけおめ、私使ってもいいですか？」「うーん、この人には使ってもいいです。先生には使ってもいけません。私ならこの人には使います。この人には使いません。でも、あけおめの方が友達とは仲良くなれます。」このようなことは教科書には書いていません。で、この時に必要なのはふさわしい日本語とか生きた日本語です。例えば、日本語教育という世界は、当然のことながらできるだけ無難な日本語を身につけてもらって、外国人の人が不利益を受けないということを優先してますから、教科書には「あけおめ」を載せることはできません。ただ、いわゆる仲良くなれる日本語みたいなものが絶対にあるわけで、それを知っているのは特に若い皆さんです。例えば、ふさわしい日本語の話をする時に「あけおめ」などと言ってしまったら、問題なんじゃないか、怒られるんじゃないかなと心配になるかもしれません。もっと言うと、日本人を代表してそんなことを言ってしまっていいのかなみたいなことを考えることがあります。この場合は、例えば、「奈良県在住の 20 代女性である私はこういう言い方をします」と言えばいいわけです。「20 代女性は『あけおめ』というのは珍しくありませんが、私の母は 50 代女性なんですけど、うちの母はあけおめとは言いません」というふうにちゃんと説明する。ある意味、勉強するというよりは、自分の生きた日本語、ふさわしい日本語を、外国の方々に伝えていくことは、勉強しなくても、ボランティアの方々はできるのです。もう一つが生活経験です。定住者と参入者という考え方です。大体、地域にいらっしゃる外国人の方々には、海外から直接引っ越してく

る方と日本国内の別のところにいて工場で働くために引っ越してくる方の 2 パターンがありますが、大体の場合は海外から直接来るよりも、他の市から引っ越してくる人のほうが多いです。そうすると、外国人と日本人という対立で考えるのではなくて、例えば皆さんは奈良市に長い間住んでいて、奈良市外から引っ越してきた人がいるとします。外国人かどうかは置いておいて、例えばその人たちに奈良市で美味しい食べ物屋さん、安いスーパー、素晴らしいお寺、安く遊べるカラオケ、何でもいいんですが、皆さんは定住者ですから生活経験から伝えられるものがあるわけです。皆さんは日本人だから、外国人の方々に必ずしも“は”と“が”の違いを教えないといけないと決まっているわけではなくて、よそから引っ越してきた外国の人達に奈良市の魅力を伝えるということで全然構わないのです。むしろ、その方が求められているかもしれません。能動文から受動文への変換の仕方よりも、裏の万代できゅうりが２本５０円で売っているということや、安売りは火曜日に限る、みたいな話のほうが、生活者として非常に重要な情報である可能性は十分にありえるはずなのです。このようなリアルな情報を与えることで色々と話しも弾むと思いますし、その会話をしていること自体、ちゃんと言語能力の底上げ、押上げのきっかけになります。実は日本語ボランティア教室の場合は基本的に日本人と外国人と言う対立以前に定住者と参入者という対立があって、定住者の皆さんは定住者としての情報を与えていくことも一つ重要な方法です。奈良市の魅力みたいなもの、奈良市で生活していくうえで便利なこと。例えば専用ゴミ袋があるかどうかといったことも結構重要だったりします。

積み上げ式の限界

日本語教育の話にもう一回戻ると、留学生の皆さんの積み上げ式の特徴的な授業というのは、1 日 45 分を 5 コマ、週に 5 日やって、一週間に 25 コマやるというのが、日本語学校の一般的なカリキュラムです。これを教えると当然のことながら、はい、教えます、復習します、小テストします、教えます、復習します、小テストしますということを繰り返すことになります。非常に定着はいいです。記憶強化が可能です。つまり、教えたことをきちんと復習して、小テストをして、理解を確認して昨日はここまでやりました、という話をして続きをやる方式です。小学校でもそうだと思いますが、いわゆる積み上げ式教育に必要な条件は毎日やることです。毎日やること。それに対して地域日本語学習者は大体、市民センターとか市役所みたいなところで 1 日で 2 時間を週に 1 回やるところが普通です。2 週間に 1 回のところもあります。だいたい週に 1 回です。エビングハウスという人が忘却曲線というのを作って、忘却というのは覚えた瞬間から始まっていて、本当に 10 分後にもかなり記憶が失われて、1 時間後には半分ぐらい失われていて、1 週間後には 77%が失われていると言っています。この忘却を防ぐために必要なのは記憶強化というもので、忘れかけたところにインプットすることを繰り返すことによって、忘却曲線をとどめることができるというのが記憶のシステムです。だから、毎日学習するということはとても意味があるわけです。ピアノをやってる人が毎日ピアノを弾かないと指が動かなくなるというのと、似たようなものだと思ってください。繰り返しは重要です。だから、学校教育とか日本語学校のシステム、短期

間にものを教えるという教育上のシステムにおいて非常に効率的です。じゃあ地域日本語教室も毎日やったらいいんですかという話になるのですが、昼間仕事しているわけですからそんなことはできません。週一回です。一週間後にはだいた 77%忘れています。例えばちょっと用事があったり、国に帰ったりしたら 2、3 週間空くこともよくあります。それで久しぶりに来ても、前やったことを覚えていません。地域日本語教室の現場で積み上げ式教育がどれくらい意味があるのかというのは非常に怪しいです。もし皆さんが小学校の先生になって、小学校で子どもたちはできるだけ自由であるべきだというふうに学習指導要領が改定されて、小学校は週休 6 日制にしましょうということになったとします。週 6 日休みになって 1 日だけ授業日になったら、算数の授業は永遠に進まないです。「先週やったこと、覚えてますか。」「覚えてません。」「じゃあ、もう 1 回やりますよ。」「はい、わかりました。」「やりました。」次の週また、「覚えてますか。」「覚えてません。」となりますよね。そう考えると、地域日本語教室で週 1 日の学習形態でいわゆる我々が慣れ親しんだ積み上げ式教育をしようということに根本的な間違いがあるのです。このことをいろいろな教室で言っています。こういうことを言ってると、『みんなの日本語』の敵対者だと言われるんですが、そういうわけではないのです。あくまで、毎日授業をやる、留学生タイプの授業だったら、『みんなの日本語』は素晴らしい教材だと思います。でも地域日本語教室には向いてないのです。なのに、地域日本語教室の人は一番有名な日本語教科書だということで『みんなの日本語』使ってしまいます。我々はこの問題を是正したいわけです。じゃあ 1 週間に 1 回の授業でも、何とかコミュニケーションというもの、もしくは日本語というものを少しでも身につけてもらうためにどうしたらいいかと言うと、これは逆に記憶を逆手に取る方法がいいと思います。皆さんもよくわかると思いますけれど、例えば海外旅行に行った時に、わからないなりに英語やその他の言語を使って、身振り手振り使って、コミュニケーションをしますよね。その時にどういうことをよく覚えているか、どういうフレーズがよく理解できたかと言うと、単純に単語帳に載っている上から 10 個のフレーズではないですよね。自分が実際に使ってみて、向こうの人が“I see”みたいな感じで、わかってくれたとき、だいたいそのフレーズは忘れません。やはり、コミュニケーションが成功したという記憶が言語習得に直結しやすいということは、記憶のシステムからしても明らかだと言えます。そう考えると、地域日本語教室が週 1 回しかないのであれば、コミュニケーションをする、そして成功した、もしくは通じたという体験を繰り返してもらうというのが一番現実的なコミュニケーション言語習得の場だろうと思うわけです。皆さんが英語の勉強をしたくなる瞬間を当てます。海外旅行から帰ってきた後です。よく考えたらおかしいですね。行く前に勉強した方が便利に決まってます。でも、海外でちょっとでも言葉が通じたという鮮烈な記憶があるとモチベーションが上がるわけです。文法の勉強、単語帳の勉強をやってもモチベーションが上がりません。これは日本に住んでいる生活者としての外国人の方も一緒です。楽しくおしゃべりをして通じ合ったなぁという記憶があったら、「楽しかった。来週もまた来ます。日本語上手くなってきたような気がしました。」となります。これが一番現実的な週に 1 回の方法だということになります。海外旅行体験を毎週させるみたいなイメージです。

（一橋プロジェクト版）「やさしい日本語」の特徴と基本理念

ここまで話をしてきたのは、我々がやっている「やさしい日本語」の話です。災害時だけではなく平常時のコミュニケーション、『にほんごこれだけ！』を使ったような言語補償的「やさしい日本語」に関してです。これは実際に横浜でやったプロジェクトですが、役所の方に文章を書いてもらってその文章を入力すると、「あなたの文章のここが難しい」という指摘が出て、「だから、もうちょっとやさしく書き換えましょう」という、役所の方向け検索システムを作りました。横浜市で実際に使ってもらっています。各自治体と共同で電子ミニ「やさしい日本語」を提供するというようなことを研究でやってきました。一方で、教材の開発と啓蒙を通して、地域社会における共通言語としての「やさしい日本語」の普及に努めるということもやってきました。つまり、前半部分の「やさしい日本語」の話をまとめますと、日本語母語話者と非母語話者の歩み寄りがあるということ。週一回の日本語ボランティア教室では基本的におしゃべりをしてほしい、文法を教えるのではなく、おしゃべりをしてほしい。しゃべる機会がいちばん重要であるということ。そして記憶のシステムから考えるとコミュニケーションの成功体験みたいなものが非常に記憶に残りやすいものであるということを話しました。地域日本語教室では１対１とか１対２、３人ぐらいのところがたくさんありますので、本当におしゃべりをしてほしいと思います。『にほんごこれだけ！』のコンセプトは、『旅の指指し会話帳』みたいな感じです。教材を挟んで、「今日何食べましたか。」「私はパンを食べました。」みたいにおしゃべりをするという感覚で使ってもらおうと作りました。「やさしい日本語」といってもいろいろあるんですけども、実は外国人に対する教育ということも、もちろん重要なんですけれども、日本人に対して、そのような理念を広めていくということも重要だと思います。もっと言うと小学校の先生はまさに「やさしい日本語」だと思うのです。いかに人に対してわかりやすく日本語を話すかです。

「やさしい日本語」の内容　―Step1 と Step2－

ここまで話してきたのは「やさしい日本語」といっても、特に『にほんごこれだけ！』に含まれるような話でした。外国人の人たちにとって重要なことは産出レベル、自分で喋れるレベルであって理解して聞けたらいいという話のレベルよりも、まず自分が話せることが重要であるという考えに基づいて作ったのが『にほんごこれだけ！』の Step1 です。自分が話せることが重要だから、文法の講義型の授業ではなくて、おしゃべりをしてもらう方が重要ですよ、という話になります。聞いて分かればいいようなものは後回しにします。地域日本語教室に１年間、とりあえず週１回、頑張って通ってくれた人には最低限地域における初級というものが伝達できる教材を作って、その啓蒙を進めています。本当は地域日本語教室のボランティアをやってる人たちにも報酬を払って、国として日本語教育、地域型日本語教育というものをちゃんと進めていきたいという希望はあるのですが、今のところはボランティア教室の人たちに甘えるしかないので、せめて役に立つものを作りたいというのがこの教材を作った時の考え方でした。有名な教科書だからといって、前にやったことを覚えていることが前提になってい

る教科書というのは、週１回の地域日本語教室には極めて不向きだと、この１点を伝えていく。また、すぐ日本語を教えるといえば文法や勉強になってしまうのですが、必ずしも地域日本語教室において文法説明というのはそれほど重要ではないという話ですね。そういったことを伝えてきました。

『にほんごこれだけ！』

『にほんごこれだけ！』の「いつもしていること」の課では、「シャワーを浴びています。」「料理をしています。」「新聞を読んでいます。」「新聞読みますか。」「新聞読みません。」「中国の新聞は読みますか。」「あっ、たまに読みます。もらいます。ただで配ってます。読みます。」「ああ、そうですか。どんなところを読みますか。」「日本語の出来事が中国語で書いてあります。」「日本の出来事が書いてあるんですね。最近読んで面白かった記事は何ですか。」「こないだ、エンペラー……天皇が辞めると言ってました。」「そうなんですか。そういう風に書いてましたか。」と、こんな感じで進めます。指差しながら、間に挟んでおしゃべりをしていきましょうという風な教科書です。実際にテキストに書いてあるような喋り方をしていって、例えば 2 時間の教室を全部おしゃべりにするというのは、結構、喋る側の技能もいるので、無理だったら無理でいいのです。初めの 30 分でも終わりの 30 分でも、学習者が産出する、学習者が喋る機会がある教室にならないといけませんよ、ということです。これ皆さんもそうですよね。英会話教室に行ったのに、自分が喋る機会が一切なくて、ずっとネイティブの人が喋っていたら困りますよね。やはりそうならないようにした方がいいです。

「やさしい日本語」と国語教育

それでは後半は国語教育の話をしたいと思います。これは平成 24 年度版中学校国語の教科書（光村図書）です。実はこの教科書ももう今、バージョンアップして消えてしまったのですが、先程お話した弘前大学の佐藤和之先生が「やさしい日本語」という教材を中学校 2 年生の国語の教科書に執筆して掲載されていたことがあります。

「やさしい日本語」という教材が国語の教科書にも掲載されたのは非常に画期的なことだと思います。ただ、教科書に掲載されたのは説明文なんですね。実際に「やさしい日本語」を喋ってみようとか書いてみようというのではなくて、説明文として、「やさしい日本語」というのがありますよということを中学生にも教える教材なのです。ですので、その意味で言うと中学生自身に「やさしい日本語」を話したり書いたり、もっと言うと「やさしい日本語」を話したり書いたりするのは何のためかということを考えさせる教材へと、もう一歩踏み込みたいなというところがあります。やっぱり、実際にやってみないとわからないということがありますよね。内容も先程言ったように、弘前大学の佐藤先生は災害時において日本語に不慣れな外国人を対象とするということを強くモットーとして持っておられるので、そのことが中心に書いてあります。これも非常に重要なことなのですが、やはり、全く「やさしい日本語」を知らない人に対して「災害時において、日本語に不慣れな外国人を対象とする」という書き方をすると、ある誤解が生まれるんですね。それは何かと言ったら、「外国人の人、特に日本語があまり得

意でない外国人の人は、災害時はとても困るけど、普段は困っていないんだ」という考えです。困っているということをどのように測るかにもよると思うのですが、本当に災害時だけ困っていて、普段は全然困ってないのか、そんなことは絶対ないはずですよね。ですので、その意味でいうと、そういったところはどういう風に中学生に伝わったのかなとこの教材を見ていて思いました。

国語科教育では「やさしい日本語」を一切扱ってこなかったのか

「やさしい日本語」は外国人に対してだけでなくて、日本語母語話者に対しても効果的だという考え方があるというのは今まで話してきたとおりです。基本的には対外国人の話ですけども、Easy Japanese じゃなくて、Plain Japanese としては、相手にわかるように話すという技術が学校の先生は言うまでもなく、多くの社会人に求められている技能だろうと思うからです。こうした方向性の一つとして、学校教育（国語科教育）で「やさしい日本語」を教えると良いのではないか、という提案をしばしば目にすることがあります。これは、研究発表のレベルでもありますし、日本語教育関係者が言うこともありますし、日本語教育でも国語科教育でもない第三者が言うこともあります。いろいろなところで学校教育、国語科教育の中で「やさしい日本語」をもっとちゃんとやるべきだという論調が出てくることがあります。ここで一つ、後半で考えてほしいことは、学校教育、特に国語科教育において「やさしい日本語」は一切扱ってこなかったのかということです。実はそんなことはないのではないかという話をしたいと思います。佐藤和之さんの教材はこうした提案に対する実現の形の一つではあるのですが、必ずしもそれだけでうまくいくわけではないので、もうちょっと古いところから振り返ってみたいと思います。ちなみに、佐藤先生の教材の中では「やさしい日本語」というのは「特別な表現だ」と明記をしながらも、「だが、その根底にある考え方は決して特別ではない。皆さんも情報を伝えるとき、誰に伝えるのか、相手の求めていることは何か、どう表現すると相手が理解してくれるのか、といったことを考えていると思う」という文言が続きます。学校の先生の話し方や日本語教育における話し方というのは結局コミュニケーションで、伝わるかどうかということが重要なわけですから、教育において根本的な話だと言っても過言ではないと思います。

さらに、この教材の手引きの「言葉を広げる」のところにこんな書き方があります。「例えば、あなたの中学校生活について、小学生に説明するとしたら、どのようなことに注意する必要があるだろう」ということで、中学生自身に対して小学生にもわかるような話し方に言い換えなさいというものがあります。皆さんもどうですか。大学生活について小学校の子どもたちに「大学ってどんなところですか。お兄さんお姉さんたちは大学でどんな勉強をしているのですか。」と聞かれた時に、小学生に対して大学生活とはこういうものだということを説明しようと思うと、自分自身の普段の喋り方ではなく、言い換えが必要ですよね。それはすでに「やさしい日本語」という考え方と、フォーマットを同じくしています。言い換えて伝えるための方法教育というのは、言い換えると、今日の最初にも出てきましたが、情報保障のための教育だと言えます。中学生が

小学生に説明するときは情報保障ということを義務として負ってないですけども、学校の先生や日本語教師というのは当然のことながら情報保障をするということ、情報をきちんと相手に伝えるということの義務を負っている人たちだということになります。つまり、「やさしい日本語」という考え方は、言い換えて伝えるための教育、情報保障のための教育の一環であるとも言えるわけです。

「やさしい日本語」っていうのは相手にわかりやすく伝えようという意識の表れです。現行の学習指導要領にもこういう文言があります。これは小中学校ともですが、目標に「伝え合う力を高める」というのがまず書いてあります。そして、各学年の目標に「相手に応じ」、「相手や目的に応じ」、「目的や意図に応じ」、もしくは中学校では、「目的や場面に応じ／目的や意図に応じ」ということで、非常に「なんとかに応じ」というのが多数出てきます。これらはすべて、わかりやすく相手に伝えるということです。特に先ほど私が言った「比較検討」の例みたいなことは、結局このことですよね。どのようにして相手に伝えなければならないか、わかりやすく相手や目的に応じて言い換えたりして伝達しないといけないのではないかといったことは、実は小学校や中学校の学習指導要領にもちゃんと書かれているわけですね。「やさしい日本語」とは書いてないですが、その理念的な部分は実は指導要領でも織り込み済みであると言えます。

小学校国語科教科書に見る「言い換え」

ここまでのお話は、主に私が自分で研究している地域日本語教育の例でしたが、学校の教育の例もいくつか挙げます。学校教育において「やさしい日本語」というのはすごく新しい理念で全くやってこなかったのかと言ったら、そんなことはありません。小学校国語科で「やさしい日本語」的な、言い換え的なことをきちんと扱ったかどうかを調べようと思いまして、昭和 27 年度に使用開始の教科書から平成 23 年度に使用開始の教科書まで、約 60 年分ぐらいの 1,285 冊を一冊ずつ見ていって、どういうことが書かれているかということを調べてみました。どういう結果になったかということをお伝えしたいと思います。

教材を 1,200 冊、1 冊ずつ見ていって、「具体的な語や文を書き換えたり言い換えたりすること」というような教材意図であると思われる教材というのを 279 教材抽出しました。それを分類して本当に「やさしい日本語」という考え方が学校教育になかったのかどうかということを調べました。

結果を次の 11 種類に分類してみました。皆さん覚えていると思いますが、1．推敲、書いた作文を見直しましょうみたいなもの。2．表現の違いを考える。3．わかりやすく言い換えたり書き換えたりする。これらはまさに、「やさしい日本語」です。これはちょっと違うんですが、4．文を切る・つなぐ。文が長いので切りましょう、もしくは、二つの出来事を接続してくっつけましょう。5．句読点で意味が変わる。有名なのは「ここではきものをぬいでください」というやつですね。「は」がポイントで「、」を打つ位置によって、「ここで、はきものをぬいでください」で靴を脱ぐわけですよね。「は」の

後に「、」を打つと、「ここでは、きものをぬいでください」と、着物の話になってしまうわけですよね。「、」の打つ位置で意味が変わるということです。6．間違いを直す。推敲とちょっと近いんですけども、推敲は自分の文を見直すことで、この場合の間違いを直すというのは、この文には間違いがあります、どこが間違いですか、みたいなものです。7．複合語を分けたりつないだりする。4番と似てるのですが、単語レベルです。8. 漢語を和語にする。これはまさに言い換えですね。さっき言った「比較」を「比べる」、「検討」を「考える」に置き換えるということです。連体修飾を展開する。これはちょっと難しいんですけども、どういうことかというと、実は私たちの使っている日本語というのは、連体修飾構造を無限に作ることができます。関係代名詞も一緒です。『これはのみのぴこ』という絵本を知ってます？　「机の上にある本の上にある鉛筆の上にある消しゴムの上にあるピン」みたいな内容です。日本語母語話者でも一瞬で理解できないのですが、実は連体修飾構造を無限に作っていくことができます。これがあればあるほど、分かりにくくなるということで、先ほどお話した横浜の、我々が作った「わかりにくい日本語チェッカー」でも、連体修飾というのをものすごく重視していて、連体修飾の入れ子構造が20以上になっていると「直しましょう」というチェックを出すようにしていました。この連体修飾構造を展開するということを扱っている教材が昔ありました。10. 外来語を和語にする。これも8番と同じですね。11. 同音異義語の意味の違いを考えるみたいなものもありました。

具体的に見ると、こんな感じ（グラフ）になりまして、実はわかりやすくというのは全体のうちの上位から3つ目のところ、58教材ありました。少なくとも、1、280冊ぐらい見たうちのわかりやすく言い換えましょう、書き換えましょうという、まさに「やさしい日本語」に一番近い理念の教材というのは、少なくとも58教材あったということですね。もちろん、教科書の作成者の人たちが「やさしい日本語」の教材にしようと思って作ったわけではないと思います。簡単に言えば「やさしい日本語」というのは非常にシンプルな話で分かりやすく伝えましょうと、それだけなんです。国語の教科書ではやっていないのか、やっています。分かりやすく伝える教材はいっぱいあります。連体修飾「きれいにふいたつくえ」というよりも、「つくえは、きれいにふいてあります」の方が分かりやすいでしょう。これが連体修飾の展開の例ですね。これは実際あった教材です。

「わかりやすく言い換えたり書き換えたりする」教材

例えばどんな教材があったかというと、昭和29年に使われていた教材ということになります。昭和29年に使われていた教材ですから、みなさんからすると、おじいちゃんおばあちゃんが使っていた教材ぐらいになるかもしれません。教育出版3年上。「つぎのことばを、わかりやすくいいかえましょう。（イ）（ロ）（ハ）のうち、いちばんよいと思うものに〇をつけなさい。」現代はこういうのはあまりないと思うんですけど、この頃の教科書は、問題集みたいなのがたくさんありました。（1）川は山からかけおりる。（イ）川が山からいきおいよくながれる。（ロ）川の水がうごく。（ハ）川が山か

らかけ足でおりてくる。みたいな擬人法の話のようなもので使われたりします。こういう教材見ていると、日本語教育っぽいなと思うんですよね。

続いて昭和 31 年の教科書ですね。東京書籍 4 年下。「耳慣れないことばは使わないようにしましょう」という例として、「バスが故障しましたから、コーシャにお乗り換えください」というときの「コーシャ」というところがカタカナになっているとわかりにくいと、これは実は「コーシャ」っていうのは、後のものという意味なのですが、そうではなくて、「後ろのバスにお乗り換えください」と言った方が伝わりやすいだろうということです。「遺失物の捜査」とか、「名古屋以遠不通」というような音も、音声で聞くと聞き取りにくい例として挙げられています。そして、まとめの部分では「ことばは、自分の考えを人に知らせるものである。むずかしい言葉や、あまり使われないことばを使うと、それを聞いたり見たりする人にわからないことがある。わかったとしても、わかるまでにちょっと時間のかかることがある」。ここをみると完全に「やさしい日本語」的な話になります。実は災害時の「やさしい日本語」の問題でもやはりこのようなことが多々あったというふうに言われています。例えば、阪神淡路大震災の時に私は大学生だったのですが、炊き出しボランティアみたいなものをずっと手伝っていました。その時に食料の配布とかをやっていたのですが、アナウンスをしていた方が、「ただいまから炊き出しを開始します。」と言いました。まず、炊き出しがわからない。その後に、「ご希望の方は容器を持参してご参集ください」と言ったんですね。それは、当然、日本人だったらわかるかと言ったら、聞いた瞬間、「なんて？」と思わず、聞き直したくなる、と思うのです。特に一番最後のとても重要な「ご参集」はまずいですよね。やはり「集まってください」と言ってほしいです。容器もわかるかどうかわからないけれども、入れ物でもいいし、「持参して」も「容器を持って集まってください」でいいんです。なぜ、わざわざ「容器を持参してご参集ください」と言わないといけなかったのか。まさにここの事例であると思います。音声だと伝わりにくいことと、書き言葉と話し言葉の違いにみたいなものも「やさしい日本語」では重要だと思います。いわゆる漢語はすごく同音異義語が多くて分かりにくいですよね。

外来語にはこういう例がありました。昭和 43 年使用開始の教材です。「次のような野球用語の意味を説明してみましょう。」「フライ」「ヒット」「7 回の表」「延長戦」「バント」「バッテリー間のサイン」というのが出ていました。これは当然わかると思いますが、野球について詳しくなる教材ではありません。しかし、昭和 43 年という非常にみんな野球が好きだった時代に、たぶん教科書を作る人が考えたわけです。例えば、野球が好きな子がこれをクラスの前で説明をするというタスクを通して、説明の方法を考えてくれたらいいなといった教材だったのだと思います。そのようなことを考えますと、例えば、全然、野球のルールを知らない子たちに対して、野球の得意な子を一人呼んできて、「説明してあげてくれる？」「はい、分かりました、今から延長戦の説明をします。野球は 9 回行われます。表と裏があります。表に先攻が攻撃すると、後攻が守っています。裏だと後攻の人が攻撃していると、先攻が守っています。0 点同士、もしくは 5 点同士など、点数が一緒で決着がつかなかったら、10 回に延長なります。」とい

った説明を多分したのだろうということになります。日本語教育の典型的な説明のタスクとしてよくあるものだと思います。こういうのが昭和 43 年利用開始の教科書にも載ってたんだなぁと思うと、本当に国語教育の積み上げ方式というのは歴史が長いなぁと思います。ちなみに昭和 43 年と言いますと、1968 年です。1968 年当時と言ったら日本語教育は始まったばかりぐらいの時期です。初めて技術研修生を受け入れて現代的な日本語教育をどのようにしていくのか考え始めた頃です。外国人のための日本語教育ができた頃ですから、その頃にはすでにこういう教材が国語科教育にあったという事実を日本語教育の人にも知ってほしいと思います。

昭和 49 年使用開始の教科書に「わたしたちは、話をするとき、聞き手にわかるように話し方をくふうする。聞き手が大ぜいの場合は、みんなにわかってもらえるようにと考えて話す。文章を書く場合も、これと同じことを心がけなければならない。6 年生の君たちは、最上級生として、学校全体の友だちに読んでもらうための文章を書かなければならないことがあるだろう。そういうときには、まだ漢字も少ししか読めないし、ことばもあまり知らない低学年の人たちにも、よくわかるような書き方をくふうする必要がある。」という例があります。最上級生の 6 年生に対して、低学年の子どもがわかる文章を書くときの心得みたいなものが書かれています。これも完全に「やさしい日本語」だと思います。具体的な活動はこれです。「図書館係のひとりが、けいじ板に出す通知文の原案を、上のように書いた。しかし、これでは、低学年の人たちにはわからないところがあるだろう。どう直したらいいか、研究してみよう。」この「上の」というのは「図書館係からの通知　今度、学校図書館に、新刊書が多数はいりました。物語はもちろん、学習参考書や事典類など、各種あります。図書館は、月・火・木・金の午後 3 時から開館します。貸し出しもしています。積極的にご利用ください。」という部分です。完全に先ほどの「容器を持参してご参集ください」の話と一緒で、漢語が非常に多い。漢語が多いものを 1 年生がわかるように和語に直してみようみたいな活動をさせたのだと思います。ちなみに「やさしい日本語」の問題を考える時にもう一つだけ言っておかないといけない問題があります。実はここに書かれているこの文章は、たしかに小学生の低学年に対して適当ではありませんが、書き言葉である場合、中国語母語話者の人にとっては、このほうが読みやすいです。中国語母語話者、つまり漢字圏なのか非漢字圏なのかが、「やさしい日本語」の、特に書き言葉の場合には決定的な役割を与えることがあります。いわゆる低学年の子どもたちに対してわかりやすくする日本語書き換えというのは、非漢字圏の人たちに対してはほぼ共通で効果的だと考えられていますが、いわゆる漢字圏の人たちが読むことに関して言えば、漢字のままの方が分かりやすいという事実です。「やさしい日本語」という話をずっとしてきましたが、こと書き言葉に関しては漢字圏と非漢字圏は絶対に分けて考えないといけません。最近、本当に漢字で書いてあれば、中国語母語話者は理解できるのかという研究を日本語教育でしている人たちが非常に増えています。非常にありがたい話だと思います。つまり中国語と日本語で同じ単語の意味になるようなものの一致率がどれぐらいあるのか、推測可能性がどれぐらいあるのかみたいなことを一語一語全部調べていって、中国人

留学生の人達に協力してもらって、そういう一覧表みたいなものをデータとして使えるように研究しています。中国語の母語話者向けの「やさしい日本語」の研究は、漢字の問題をしっかりやらないと駄目です。効果的だったら漢字のままのほうがいいということも忘れてはいけないですね。でもこれはあくまでも 6 年生から 1 年生への文章ですから、漢語は和語に直しましょうというタスクになります。

昭和 55 年にもこういうものもありました。図書委員に対する放送原稿です。「図書委員にお知らせします。図書委員にお知らせします。今日、3 時から、図書室で、きん急に図書委員会を開さいしますから、図書委員の人は集まってください。図書委員の人は集まってください。」これは、言い換えだけではありません。伝え方の問題です。「図書委員の人は集まってください。図書委員の人は集まってください。」とおしまいの文がありますが、おしまいの文の繰り返しの部分はこれで良いか。これはさっきの書き言葉と違って話し言葉の特徴です。例えば、私が小学校の教員養成の勉強をしている時に大学の先生が教えてくれた中でいちばん印象に残っていることがあります。それは、子どもの名前を呼ぶ時に、次のどっちがいいかわかりますかという質問です。「それでは班分けをします。1 班です。山田さん、田中さん、竹中くん、吉永さん。2 班です。鈴木さん、佐藤さん、菊池さん。パターン 2「今から班分けを言います。山田さん、田中さん、鈴木さん、佐藤さん、ここまでは 1 班です。吉永さん、竹中さん、菊池さん、ここまでが 2 班です。」違いがわかりました？班分けの班の名前を先に言うか後に言うかです。その時、私は「やさしい日本語」の研究をしようと思ってなかったし、普通に教員になろうと思って勉強してたのですが、先生の説明は、「人間っていうのは名前を呼ばれる瞬間まで、はっとしない」というものでした。例えば、「1 班を言います。山田さん、田中さん」と言うと、「田中さん」のところで田中さんははっとするんですけど、班の名前が終わってしまっているから、1 班かどうかわからないですね。名前を呼ばれた後に「ここまでが 1 班です。」と言われると、あぁ、自分は 1 班だっていうのはよくわかるという話ですね。なるほどそれはおもしろいなぁと思ったことがあって、そういうのも自分が言葉の研究をしようと思ったきっかけになっているのだなと思います。ちなみに教材のこの問題は、今の話のヒントから考えるとわかるように、最後だけを聞いてもどこに集まっていいのか分かりません。最後にいくら「図書委員の人が集まってください」って繰り返しても、途中から聞いていたら、どこに集まるんだろうと思います。最後のところを「図書委員の人は図書室に集まってください」とする。繰り返すなら、「図書室に」が入っていないと、繰り返す意味がほとんどないということを、たぶんこの教材では言おうとしています。緊急とか、開催とか言葉の言い換えだけが重要なわけではなくて、必要な箇所に必要な情報を乗せるということも、わかりやすく伝えるということの重要なポイントです。

昭和 55 年の図書室の話の続きです。これも色々あるんですけども、言葉を直すところがありますかというような話です。これはちょっと省略します。

昭和 64 年、幻の昭和 64 年で、平成元年になるんですけども、教科書は 64 年度版でもう印刷してしまっていたから、教科書だけは 64 年度版が大量にあるんですね。ちなみに 1 月 8 日から平成元年なので昭和 64 年は 7 日間しかないです。だから、10 円玉 100 円玉はとても珍しいんですが、教科書は珍しくないです。昭和 64 年度使用開始版ですが、「今日、学校で決まったことをお知らせいたします。今、旧校舎の一部の建て直しで、校庭がせまくなっています。ボールを使う遊びはあぶないので、してはいけないことになりました。必ず守ってください。」というのと、「本日、学校で決定したことを報告します。現在、旧校舎の一部改築で、校庭がせまくなっています。ボールを使用する遊びは危険なので、禁止することになりました。必ず守ってください。」というものです。最初のほうが和語っぽい言い方で、後のが漢語っぽい言い方です。和語っぽい言い方と漢語っぽい言い方。今日の話そのままですね。

もしくは、遊水池とか、ベッドタウンとか、各種文化施設、生活環境とか。難しいですよね。それでは、遊水池という言葉が分からない場合、「洪水が起きたときに…という説明の注意書きを入れたらどうですか」ということとか、ベッドタウンというのもわからなかったら、にぎやかな、のような形容動詞を入れたらいいんじゃないか。快適な生活環境っていうのが分からないのだったら、たいへんくらしやすい環境と言い換えたらいいのではないかということです。実はこの言い換えは今までの言い換えと、ちょっと違います。今までの言い換えは単純に漢語を和語に直すだけでしたよね。そうではなくて、平成 14 年度教材でかなり考え方も進んできたのだと思うのですが、情報を伝えるためには書き換えにこだわらなくても良いという姿勢が見て取れます。情報を伝えるためには、ある単語をある単語に置き換えるという単純な辞書的な置き換えではなくて、元の文章を多少崩してでも伝わるように書いた方がいいと言う思想がかなり見て取れると思います。だんだん書き換えとか言い換えも、こういう風に変わってきていると考えてもらったらいいでしょう。

その書き換えのポイントとして 3 つ挙がっているのですが、遊水地のところは、遊水地の説明がわからないから、注のかたちで括弧書きにして入れるという話があります。これ実は、括弧書きとか注の形で入れるという話は「やさしい日本語」の中で非常に問題となっている話です。今日これまでに私は分かりやすく言い換えましょうということで、言い換えを強調してきました。言い換え自体はものすごく効果的だと思うのですが、実は役所の文書とか、公的文書といったものに関して言うと、言い換えてしまうと困るものがあります。例えば、婚姻届というのがありますよね。これを言い換えると、結婚する時に出す書類とか、結婚する時に出す紙というわけです。でも、もし婚姻届を「結婚する時に出す紙」と言い換えてしまうと、市役所で「すいません。結婚する時に出す紙、どこですか。」と言われても、考えたらわかるかもしれませんが、一瞬「ん？」となってしまいますよね。やっぱり、あの書類は「婚姻届」であるということはわかってほしいわけです。必要な言葉に関しては、やっぱり訳さない方が良いというものがたくさんあります。訳さないものに関してはどうすればいいかと言うと、こういう風に括弧書きで注をつけるみたいな形が必要なんじゃないかと言うことです。実は、NHK の

NEWS WEB EASY という、1 日に日本で起こった 3 つのニュースを「やさしい日本語」に翻訳して毎日 Web 上で流すというものがあります。これを日本語教育の教材として使っている先生も増えてきています。非常に面白いものなので、また見て欲しいのですが、これが始まるとき、私も手伝って一緒にやったんですけど、この NEWS WEB EASY では、難しい単語があったらそこにマウスを当てると、注がポップアップで出るようになっています。紙だと括弧ばっかりになってわずらわしいのですが、Web 上だとこういうことができるので、非常に魅力的ですよね。ですので、NHK でもニュースを知る上で日本語として、知っておいた方が良い一時的な単語に関しては、訳さずにポップアップで説明をつけるという風になっています。これは「やさしい日本語」の重要な問題です。置き換えられるものは置き換えます。例えば、遊水地はそのままの方がいいけど、「県下有数」はそのままじゃ別になくても大丈夫だろうと。では、「県の中でも取り立てて数えられるほど」とする。「取り立てて」が難しかったら、「県の中でも有名」でもいいと思います。言い換えます。身近でわかりやすい具体例として、各種文化施設とか町立図書館というようなものも、どんどん具体的にあげていきます。

最後にこれは外来語の例です。外来語も和語や漢語で言い換えられるものは言い換えてみましょうといったことも、最近はやられています。

小学校教科書における「やさしい日本語」に関する取り組みの実態

このように、小学校においては、学校教育、国語教育における「やさしい日本語」の取り組みは、実は昭和 20 年代から平成に至るまで、ずっといろいろな形で行われてきているということ。ただし、これだけ行なってきていて、今の日本人が「やさしい日本語」でみんな喋れているかと言うと喋れていません。取り立てて「やさしい日本語」を導入しても、急に日本人の喋り方がやさしくなるということは、絶対にないだろうということは、認識しておかないといけません。それでも、小学校の先生になる人は頑張ってほしいと思います。学校教育における「やさしい日本語」の取り組みは、最近やや低調です。教材を調べたら、だんだん、こういう言い換えとか書き換えの教材が減ってきていますので、長期的に今もやっている取り組みを続けていくような必要があるだろうと思います。

グラフを見ると、昔に比べると全体的にだんだん右下がりに減っているのがわかると思います。ですので、これから学校の先生になる人はぜひ「やさしい日本語」ということに関しても考えてみてほしいと思います。

まとめ

というわけで今日の話ですが、「やさしい日本語」は外国人に対してだけではなくて、日本語母語話者同士のコミュニケーション、たとえば教師の話し方においても有効であるということを言いました。そして、「やさしい日本語」は日本語教育の文脈で語られることが多いですが、学校教育、国語教育でも扱われるべきだということです。さらに「やさしい日本語」は外国人児童生徒への指導においても、例えば国語の教科書が難しすぎるんだったら、もうちょっと簡単な日本語に言い換えた教材を使う。こういった

教材をリライト教材というんですけども、そういう可能性もあると思います。とにかく日本国内で「やさしい日本語」を使うということは、結局は日本国内ローカルだけども、日本語を使ってグローバルな視点を持ちましょうということなんですね。色んな人たちに言葉が通じるということの意味っていうことを考えるというお話です。私の話は以上となります。ありがとうございました。

●質疑応答

司会：ありがとうございました。質疑応答の時間をということだったんですけれども、たくさん例を出して詳しくご説明いただきましたので、どうしても一つ聞きたいことがあるという方の質問に限らせていただいてよろしいでしょうか。もし、何かありましたら、挙手をお願いします。

（質問１）

質問者：今日は非常に興味深いお話ありがとうございました。

まず、多言語化の補償教育についてのところで、私は非常にビビっときたといいますか、私自身は外国語教育の方から多言語活動とか多言語教育とかそちらを一生懸命進めようとしています。それで双方からのアプローチという意味で、日本語教育でこういう取り組みをされているのかということで非常に興味深く拝聴しました。大きく分けると２つなんですけれども、質問がありまして、まずその「やさしい日本語」の位置づけ、言語的な位置付けでございます。例えば、母語話者の日本語、あるいは美しい日本語というのか、正しい日本語というのか、あるいは国語って言っていいのか分かりませんが、そういった母語話者の日本語が一番上にあって、その次に、例えば留学生たちが今使っている、あるいは目指しているそういう日本語、カミンズで言うと CALP ですね、認知学習言語学まで含んだそういった日本語、その次の３つ目として、「やさしい日本語」すなわち、地域社会の共通語としての基本的な対人伝達能力といった捉え方で良いのかどうかっていうことが１つ。２つ目は、例えばこの「やさしい日本語」を、言語権の立場から見た場合に、その意義があるんだろうかという疑問がわきました。例えば、地域社会における生活保障ということで、皆さん、ボランティアで支えましょうという場で「やさしい日本語」を広めるということなので、それはそれでいいと思うんですけども、ただ生活上、例えば、外国人の方が非常に困るのは利害が対立するような場に多いんじゃないかなという気がするんです。そうすると、例えば行政、役所だったりとか、あるいは医療であったり、あるいは教育であったり、そういった場面で自分たちの言語は保障されません。そこで「やさしい日本語」を、ということなるのか、もしそうだとすると、そういった行政側あるいは役所側、あるいは学校側、病院側が「やさしい日本語」を使わなければならないっていうのは、法的な規制がなければ、彼らの言語権というのは保障されないのではないんじゃないかなという風な、そういったことをいろいろ考えていました。いかがでしょうか。

森氏：ありがとうございました。前半の方なんですけども、基本的によく言われるのは「やさしい日本語」の前には国立国語研究所で野元菊雄先生たちが簡約日本語というのをやっていて、これがたいへんたたかれました。いわゆる二級日本語を作るということは意味のないことだ、みたいな話がよくあると思います。

この問題は「やさしい日本語」には、つきものの話なので仕方がないかなというふうに思うんですけども、基本的に、たとえば母語話者の日本語が 1 番であって、2 番目に例えば留学生とか非母語話者の日本語があって、「やさしい日本語」があるみたいな階層分けしているわけではなくて、例えば、学校の先生が子どもたちに喋る時にもわかりやすいに越したことはないだろうということをお話ししていると思います。つまり、言語そのものの位相が変わるということをしてるわけではなくて、言語使用の方法が変わるということで、一人の人間の中にはいろんな日本語の位相というものがあって、その日本語のチャンネルの切り替えみたいなところで、少しでも分かりやすくしゃべるようにしたらいいんじゃないかということです。切り離して「やさしい日本語」という言語そのものが存在するというようなイメージでは、私の中ではないということです。

もう一つの方ですけども、私の話で主に念頭においているのは、言語サービスですね。基本的にはいわゆる利害が対立しない何らかのサービスを提供する時に、そのサービスの提供をできるだけ、「やさしい日本語」でやった方が受益者が多くなるだろうという話です。先生のおっしゃるとおり、利害対立場面では私は通訳をつけるべき、もしくは必ず、母語での言語を保障すべきだと思っています。典型的なのが法廷通訳ですけども、やはり全てこれを日本人側に義務づけるということをやったとしても、その効果というのは分かりませんので、利害が対立するような、極めて深刻な場面においては、私の今日のような話は当てはまらない。基本的には言語サービスに特化した話だと考えていただければ結構です。

質問者：よくわかりました。ありがとうございました。

司会：では、残念ながら時間になってしまいましたので、第一部の方はこれをもって終わりたいと思います。皆さん、是非、お手元の質問シートに質問をお書きください。このシンポジウムの成果は 3 月に報告書として刊行する予定です。その際に森先生にもご協力いただいて、ご質問の中で共有したほうがいいなというものがあれば、そちらの報告書の方に、先生のご意見なども踏まえて掲載をしたいなと思っています。森先生、ありがとうございました。

「やさしい日本語」と学校教育

京都外国語大学教授
森 篤嗣

2017年12月9日（土）
奈良教育大学国際交流留学センター主催シンポジウム
教員養成大学におけるグローバル人材育成を考える
（於：奈良教育大学 大会議室）

「やさしい日本語」とは

- 地域型の特徴に留意し、必要最小限の文法項目（と語彙）からなる文法シラバスを「やさしい日本語」と呼ぶ。（「災害時の「やさしい日本語」」（佐藤2004など）とは独立のもの）
- 「やさしい日本語」は補償教育の対象としての側面を重視し、その文法項目は日本語で生活するのに必要最低限のものという観点で選定されている。

2

「やさしい日本語」が必要なわけ

- 定住外国人（生活者としての外国人）が増加し続けている。
- 「多言語化」だけではすまない問題がある。（cf.岩田2010）
- 完全な多言語化ができないことに対する「補償教育」（山田2002）の対象として、（来るべき「初期日本語教育の公的保障」の対象として）「やさしい日本語」が必要となる。

3

「やさしい日本語」が目指すもの（1）

- 「やさしい日本語」が目指すのは、外国人だけに日本語習得を押しつけない、寄り添いあう地域社会像である。
- これからの地域社会における「やさしい日本語」（庵2009より）

日本語母語話者（受け入れ側の日本人）
↓コード（文法、語彙）の制限、日本語から日本語への翻訳
やさしい日本語（地域社会における共通言語）
↑ミニマムの文法（Step1、2）と語彙の習得
日本語ゼロビギナー（生活者としての外国人）

4

「やさしい日本語」が目指すもの（2）

- 外国人側に「やさしい日本語」（Step1, 2）を学んでもらう一方、日本人側にも「やさしい日本語」で話す、書くことを学んでもらう。
- 外国人側がさらに上のレベルを目指す場合にはその手助けもできるようにしておく。重要なのは、「やさしい日本語」が外国人が日本で生活する上で最低限必要な日本語である点であり、そこで終わらなければならない（それ以上やる必要はない）と主張しているわけではない。

5

日本語ボランティアの役割

- 参加できる人ができる範囲のことを提供する
- 専門性は問われない
- 多文化共生社会は，「深く狭く」より「広く浅く」
- 外国人の支援だけでなく，日本人への働きかけ
- ボランティア活動参加への垣根は限りなく低く
- 日本語ボランティアの二つの武器
  - 母語直観（教科書の日本語より活きた日本語を，「正しい日本語」より「ふさわしい日本語」を）
  - 生活経験（「定住者」と「参入者」）

6

積み上げ式の限界

- 留学生→1日45分を5コマ，週に5日
  - 記憶強化が可能
- 地域学習者→1日2時間，週に1日
  - エビングハウスの忘却曲線
  - 1週間後には、77%を忘却
- 週1日の学習形態で積み上げ式は無理がある
- コミュニケーションが「成功した」という鮮烈な記憶と共に言語習得は定着する

7

（一橋プロジェクト版）「やさしい日本語」の特徴と基本理念

1. 災害時の情報伝達ではなく、平常時の公的文書を対象とする（cf.岩田2016）
2. 各自治体との協働で、全市民に「やさしい日本語」を提供する
3. 教材の開発と啓蒙を通して、地域社会における共通言語としての「やさしい日本語」の普及に努める

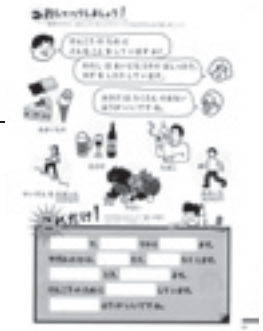
→基本理念は「日本語母語話者と非母語話者の歩み寄り」

8

「やさしい日本語」の内容
ーStep1とStep2ー

- 「やさしい日本語」は、より基本的で全ての項目が「産出レベル」（庵2006）であるStep1と、それより進んだレベルで「理解レベル」（庵2006）の項目も含まれるStep2から構成される。
- 「やさしい日本語」の実現形としての教材が『にほんごこれだけ！』で、『1』はStep1を、『2』はStep2を全て含んでおり、この2冊で「地域における初級」が完結する。

『にほんごこれだけ！』

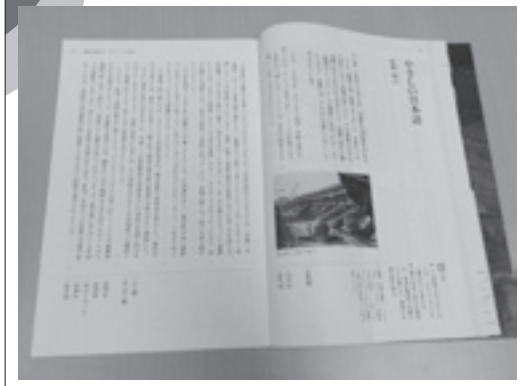


試し読み

試し読み

「やさしい日本語」と国語教育

- 平成24年度版　中学校国語科教科書（光村）



「やさしい日本語」と国語教育

- 「やさしい日本語」という教材が掲載されたことは画期的
- ただ，この教材は説明文（読むための教材）
- 中学生自身に「やさしい日本語」を話したり，書いたりすることを求めているわけではない
- また，内容としても災害時において，日本語に不慣れな外国人を対象とすることが明示されている

「やさしい日本語」と国語教育

- 「やさしい日本語」は外国人に対してだけではなく，日本語母語話者に対しても効果的であるという考え方がある
- こうした方向性の一つとして，「学校教育（国語科教育）で，「やさしい日本語」を教えるといいのではないか」という提案をしばしば目にすることがある
- 佐藤和之氏の教材はこうした提案に対する実現の形の一つ

13

「やさしい日本語」と国語教育

- この教材の中でも「やさしい日本語」を「特別な表現だ」としながらも，
- 「だが，その根底にある考え方は決して特別ではない。皆さんも情報を伝えるとき，誰に伝えるのか，相手の求めていることは何か，どう表現すると相手が理解してくれるのか，といったことを考えていると思う」
- と書かれている

14

「やさしい日本語」と国語教育

- さらに，本教材の手引き「言葉を広げる」では，「例えば，あなたの中学校生活について，小学生に説明するとしたら，どのようなことに注意する必要があるだろう」とあるように，日本語母語話者である中学生自身に対する「言い換え」も扱われている
- 言い換えて伝える方法の教育＝情報保障のための教育

15

「やさしい日本語」と国語教育

- 「やさしい日本語」は「相手にわかりやすく伝えよう」という意識の現れ
- 現行の学習指導要領（平成20年3月告示）
  - 小中学校とも「国語科」の目標に「伝え合う力を高める」とあり，各学年の目標ににも，「相手に応じ（小1・2年）」，「相手や目的に応じ（小3・4年）」，「目的や意図に応じ（小5・6年）」，「目的や場面に応じ／目的や意図に応じ（中1・2・3年）」とある
  - つまり，折り込み済みである

16

小学校教科書にみる「言い換え」

- 学校教育では，情報保障のための教育はしてこなかったのか？
- 昭和27年度使用開始から平成23年度使用開始までの1,285冊の小学校国語科教科書を調査
- 「具体的な語や文を書き換えたり言い換えたりすること」を選定基準とし，1,285冊から279教材を抽出
- 279教材を次ページのように11種類に分類

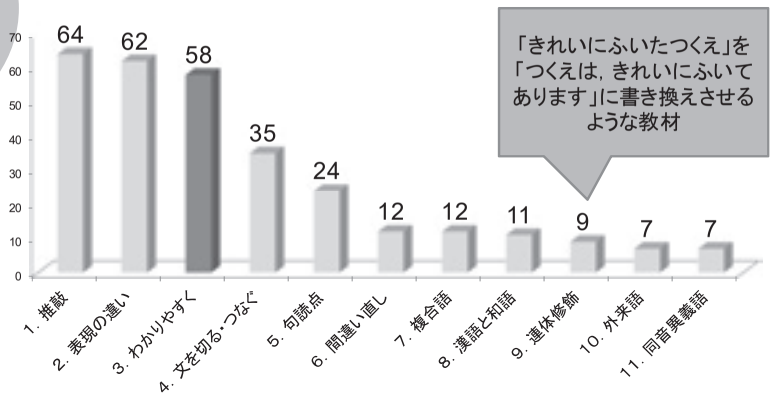
17

小学校教科書にみる「言い換え」

分類	
1.推敲	7.複合語を分けたりつないだりする
2.表現の違いを考える	8.漢語を和語にする
3.わかりやすく言い換えたり書き換えたりする	9.連体修飾を展開する
4.文を切る・つなぐ	10.外来語を和語にする
5.句読点で意味が変わる	11.同音異義語の意味の違いを考える
6.間違いを直す	

18

小学校教科書にみる「言い換え」



19

「わかりやすく言い換えたり書き換えたりする」教材

- 昭和29年使用開始／教育出版／3年上

4　つぎのことばを，わかりやすくいいかえましょう。（イ）（ロ）（ハ）のうち，いちばんよいと思うものに〇をつけなさい。
（1）川は山からかけおりる。
（イ）川が山からいきおいよくながれる。
（ロ）川の水がうごく。
（ハ）川が山からかけ足でおりてくる。
（2）川と川がおちあう。
　（イ）川がいっしょにおちる。
　（ロ）川と川がであう。
　（ハ）川と川がゆっくりながれる。

20

「わかりやすく言い換えたり書き換えたりする」教材

○ 昭和31年使用開始／東京書籍／4年下

「（一）耳なれないことばはつかわない」として，「バスが故障しましたから，コーシャにお乗り換えください」という車掌のアナウンスについて，音声だと「後者」が理解しにくい例を挙げている。他にも音声で「遺失物の捜査」，掲示で「名古屋以遠不通」が理解しにくい例を挙げてる

まとめの部分では，「ことばは，自分の考えを人に知らせるものである。むずかしいことばや，あまり使われないことばを使うと，それを聞いたり見たりする人にわからないことがある。わかったとしても，わかるまでにちょっと時間のかかることがある」

21

「わかりやすく言い換えたり書き換えたりする」教材

○ 昭和43年使用開始／日本書籍／5年下

〇次のような野球用語の意味を説明してみましょう。

フライ　ヒット　七回の表　延長戦　バント　バッテリー間のサイン

22

「わかりやすく言い換えたり書き換えたりする」教材

○ 昭和49年使用開始／日本書籍／6年上

わたしたちは，話をするとき，聞き手にわかるように話し方をくふうする。聞き手が大ぜいの場合は，みんなにわかってもらえるようにと考えて話す。

文章を書く場合も，これと同じことを心がけなければならない。六年生の君たちは，最上級生として，学校全体の友だちに読んでもらうための文章を書かなければならないことがあるだろう。そういうときには，まだ漢字も少ししか読めないし，ことばもあまり知らない低学年の人たちにも，よくわかるような書き方をくふうする必要がある。

23

「わかりやすく言い換えたり書き換えたりする」教材

○ 昭和49年使用開始／日本書籍／6年上

図書館係のひとりが，けいじ板に出す通知文の原案を，上のように書いた。しかし，これでは，低学年の人たちにはわからないところがあるだろう。

どう直したらいいか，研究してみよう。

図書館係からの通知

今度，学校図書館に，新刊書が多数はいりました。物語はもちろん，学習参考書や事典類など，各種あります。

図書館は，月・火・木・金の午後三時から開館します。貸し出しもしています。

積極的にご利用ください。

24

「わかりやすく言い換えたり書き換えたりする」教材

○ 昭和55年使用開始／教育出版／6年下

〇次の文章を伝達の原稿としてよいものに直し，伝達の練習をしてみましょう。
1　校内放送で，図書委員に
　図書委員にお知らせします。図書委員にお知らせします。今日，三時から，図書室で，きん急に図書委員会を開さいしますから，図書委員の人は集まってください。図書委員の人は集まってください。
＊おしまいの文のくり返しはこれでよいか。
＊わかりやすい言葉に直せるところはないか。

25

「わかりやすく言い換えたり書き換えたりする」教材

○ 昭和55年使用開始／教育出版／6年下

2　図書委員が学級の全員に
　昨日，三時から，図書室で，図書委員会がありました。その時，決まったことをお知らせします。このごろ，本を借りる人の増加とともに，本を乱暴にあつかう人も増加しました。それで，破損した本が多数あるので，来週，図書委員が放課後，本の修理をすることになりました。それで，来週いっぱい，本の貸し出しを中止します。
＊大事なことだけを伝達するには，どう整理するとよいか。
＊言葉を直すところはないか。

26

「わかりやすく言い換えたり書き換えたりする」教材

○ 昭和64年度使用開始／光村図書／5年下

　今日，学校で決まったことをお知らせいたします。
　今，旧校舎の一部の建て直しで，校庭がせまくなっています。ボールを使う遊びはあぶないので，してはいけないことになりました。必ず守ってください。

　本日，学校で決定したことを報告します。
　現在，旧校舎の一部改築で，校庭がせまくなっています。ボールを使用する遊びは危険なので，禁止することになりました。必ず守ってください。

27

「わかりやすく言い換えたり書き換えたりする」教材

○ 平成14年度使用開始／光村図書／5年下

　かつて，遊水地として利用されていた町の中心部は，地下鉄開通以来，けんか有数のベッドタウンとなった。駅前には，ショッピングセンター，各種文化施設も整い，快適な生活環境となっている。

町の中心部は，昔は遊水地（こう水…）として利用されていた所です。ここは，地下鉄が開通してから，県の中でも取り立てて数えられるほどにぎやかなベッドタウンになりました。駅前には，ショッピングセンターや，町立図書館，教育センター，町民体育館などの施設もあって，たいへんくらしやすい環境となっています。

28

「わかりやすく言い換えたり書き換えたりする」教材

○ 平成14年度使用開始／光村図書／5年下

「分かりやすく書き直すために，次のような工夫をしてみました」として，三つの工夫を挙げている
1．調べた言葉の意味を，「注」の形で入れる。
・遊水地（こう水のとき，川の水かさが急に増えないように，一時的に水をためておく場所，「遊水池」とも書く。）
2．易しい言葉に置き換える
・県下有数→県の中でも取り立てて数えられるほど（すぐれた）
3．身近で分かりやすい具体例を示す。
・各種文化施設→町立図書館，教育センター，町民体育館などの施設

29

「わかりやすく言い換えたり書き換えたりする」教材

○ 平成17年度使用開始／教育出版／6年下

次の外来語の意味を，国語辞典で調べましょう。和語や漢語で表せるものは，言いかえてみましょう。
・ボランティア
・スタートライン
・ホーム
・ラテン語
・アンテナ
・トイレ
・キャッチボール

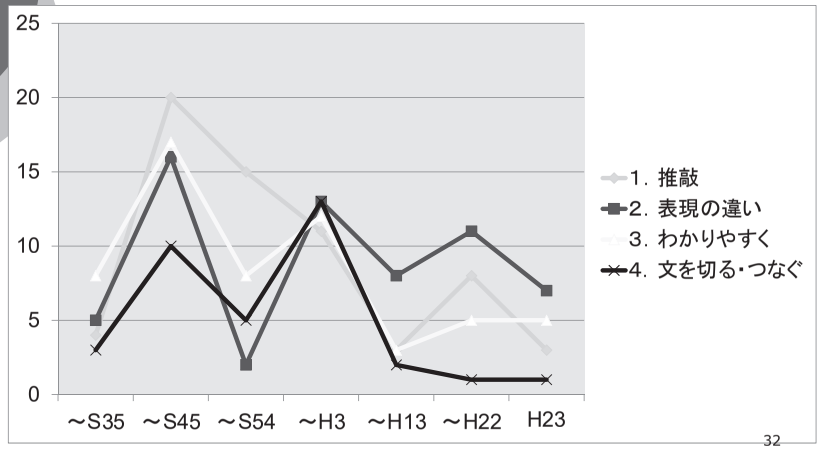
30

小学校教科書における「やさしい日本語」に関する取り組みの実態

1. 学校教育（国語教育）における「やさしい日本語」の取り組みは特に新しいものではないこと
2. 学校教育（国語教育）における「やさしい日本語」の取り組みに過度に期待を持ちすぎるべきではないこと
3. 学校教育（国語教育）における「やさしい日本語」の取り組みは，近年やや低調なので力を入れること。そして，長期的な視点で取り組みが続くように見守ること

31

小学校教科書における「やさしい日本語」に関する取り組みの実態



32

まとめ

- 「やさしい日本語」は，外国人に対してだけではなく，日本語母語話者同士のコミュニケーション（例えば，教師の話し方）においても有効（cf.森2013）
- 「やさしい日本語」は，日本語教育だけではなく学校教育（国語教育）でも扱われるべきもの
- 「やさしい日本語」は，外国人児童生徒への指導においても有効に働く可能性がある（リライト教材など）

33

参考文献

- 庵 功雄 (2009a)「地域日本語教育と日本語教育文法」『人文・自然研究』3、一橋大学
- 庵功雄，イ・ヨンスク，森篤嗣（2013）『「やさしい日本語」は何を目指すか－多文化共生社会を実現するために』ココ出版
- 庵功雄(監修)，岩田一成，森篤嗣(編)（2010、2011）『にほんごこれだけ！1、2』ココ出版
- 岩田一成(2010)「言語サービスにおける英語志向－「生活のための日本語：全国調査」結果と広島の事例から－」『社会言語科学』13-1
- 岩田一成(2016)『読み手に伝わる公用文：〈やさしい日本語〉の視点から』大修館書店
- 尾崎明人(2004)「地域型日本語教育の方法論試案」小山悟ほか編『言語と教育』くろしお出版
- 佐藤和之(2004)「災害時の言語表現を考える」『日本語学』23-8、明治書院
- 森篤嗣（2013）『授業を変える言葉とワザ：小学校教師のコミュニケーション実践』くろしお出版
- 山田泉(2002)「第8章　地域社会と日本語教育」細川英雄編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社

34

ワークショップ
「インタビュー詩」
を創ろう

横田和子（目白大学）
和泉元千春（奈良教育大学）
（協力者：岩坂泰子（広島大学））

「インタビュー詩」

考案者：
上田假奈代さん
詩人、奈良県出身。
NPOこえとことばとこころの部屋：ココルーム代表。
上田さん自身は「こたね」の手法と呼ぶ。

やまとうたは、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出せるなり。花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。
力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。
（古今和歌集　仮名序　紀貫之）

- あるテーマのもと、他者とのインタビューを通し、その内容を元に、詩を作って行く手法です。
- 他者の話が「たね」となり詩になっていきます。
- 自分の内面や想いを詩に書く必要はありません。（書いてもOK）
- 詩なので、事実を書く必要はありません。（書いてもOK）
- 想像力／創造性を働かせることを推奨します。

▼インタビュー詩の準備

- 「詩」を一つ、読んでみて、詩の身体になりましょう。
- 参加者全体に共通のひとつのテーマを決めます。
- 参加者はペアになります。（互いによく知らない、話をしたことのない人同士のペア作りを推奨。）

ぼくが　ここに

まど・みちお

ぼくが　ここに　いるとき
ほかの　どんなものも
ぼくに　かさなって
ここに　いることは　できない

もしも　ゾウが　ここに　いるならば
そのゾウだけ

マメが　いるならば
その一つぶの　マメだけ
しか　ここに　いることは　できない

ああ　このちきゅうの　うえでは
こんなに　だいじに
まもられているのだ
どんなものが　どんなところに
いるときにも

その「いること」こそが
なににも　まして
すばらしいこと　として

▼インタビュー詩の手順

①ペア同士で、先攻と後攻を決めます。

②あらかじめ決めていたテーマで、それぞれインタビューを行います。今日は、時間の都合により**制限時間６分間**です。

③６分経ちましたら、「交替」の合図をするので、先攻と後攻を交代してください。
＊インタビュー中は聞き取ったことをメモするのを忘れずに！

④聞き取ったことを元に、清書用の用紙に、詩を書きます。
（文字数、行数、縦書き・横書きなど、自由。辞書の使用OK）

⑤タイトルをつけてください。

▼注意点：インタビュー終了後

- インタビュー終了後は、ペアの相手に詩を見せないでください。
- ペアの相手に、内容の相談、質問もしないでください。
- 質問があれば、挙手をしてください。
- 繰り返しますが、詩は自由な表現です。
  インタビューの内容を正確に表現する必要はありません。
  （レポートではありません。）想像力を十分使ってください。

▼インタビューのテーマ

そばに…

たとえば・・・
「そばにいるということ」
「そばにいてほしい人」
「そばにいてくれた人」
「そばにあってほしいもの」
「そばにいたいと思うとき」

▼タイトルと作者について

タイトル

話をした人　なっきょん
詩を書いた人　せんとくん

ペンネーム、ニックネーム、本名、いづれもOK

●では、インタビューを始めてみましょう！

▼作品をシェアしよう！

・４つのグループに分かれましょう。

・グループで発表会をしましょう。（20分）

- 同じテーマでバラバラな詩が生まれてくる。
- 人の話を聴くこと、表現することのレッスンにもなる。
- できあがった作品は、相手の話が素材であるのに、どこかしら作り手の表現がにじむ。
- 100%相手の作品でも、100%自分の作品でもなく、相互の協働 によって作品ができあがる。

2017年度　国際交流留学センター主催　シンポジウム
教員養成大学におけるグローバル人材育成を考える

▼配布物

［第一部］
・講演資料（PPT資料）
・参加者アンケート

［第二部］
・座席番号

趣旨

2014年度～
学長裁量経費プロジェクト「グローバル人材」育成のためのカリキュラムに関する総合的研究

出発点
教員養成大学にいる私たちにとっての「グローバル人材」「グローバル人材の育成」って何？

［2017年度プロジェクトメンバー　※50音順・敬称略］
和泉元千春（国際交流留学センター）、櫻井綾（本学附属小学校）、佐古田康義（本学附属中学校）、渋谷真樹（学校教育講座・国際交流留学センター長）、竹内範子（本学附属幼稚園）、頓宮勝（国際交流留学センター）、中谷いずみ（国語教育講座）、橋崎頼子（学校教育講座）、横山真貴子（学校教育講座）吉村雅仁（教職大学院）

2015年度～
シンポジウム「教員養成大学におけるグローバル人材育成を考える」を開催

●1年目（2015年度）
「グローバル人材」「グローバル人材の育成」
→　教員養成の文脈で捉えなおすことの必要性とその方向性を確認する

●2年目（2016年度）
→　より具体的に学校教育現場での問題に落とし込んで考える
・多文化化する教育現場に対応できる多文化教員の資質と能力とは何か？
・次期学習指導要領と関連付けてグローバル人材とその育成のあり方を考える

※詳細は報告書をご覧ください。　URLhttp://cies.nara-edu.ac.jp/report.html

●3年目（2017年度）
学校教育の場で「グローバル人材育成」を担う教員自身にも、グローバルな多文化社会に生きているという当事者意識が必要

どのような態度・技能が必要なのか？

・ことば　を　キーワードに考える

国際交流留学センター主催　シンポジウム
2017年度　教員養成大学におけるグローバル人材育成を考える

＜シンポジウムの内容＞

［第一部］

13：40-15：10　講演（森篤嗣氏　京都外国語大学）
「やさしい日本語と学校教育」

15：10-15：20　休憩

［第二部］

15：20：16：50　ワークショップ（横田和子氏　目白大学、和泉元千春）
「インタビュー詩を創ろう」　（協力者：岩坂泰子氏　広島大学）

アンケート等は帰りに回収箱に入れてください。

［第一部：参加者アンケート（質問＆感想）］

※コメントは後日、報告等に使用する場合があります。
（★個人が特定されないよう配慮します）

［第二部：作品＆振り返りシート（感想＆承諾書）］

※作品、コメントは後日、報告等に掲載します。
（★個人が特定されないよう配慮します）

●［第一部］ 参加者の感想と講師（森篤嗣氏）からのコメント

・逆に厳しい日本語は何ですか？

→［森氏］多くの人が理解しにくい日本語です。単に難しいだけではなく，聞く人や読む人のことを考えていない日本語は厳しいです。

・ご講演の中に「ディスる」という言葉が出てきました。「ディスる」という言葉を私は「軽く悪口を言う」というように捉えていますが、この言葉もやはり説明がいる言葉だと思います。流行語や新しくできた言葉は「やさしい日本語」ではないのではないかと思いました。

→［森氏］流行語や新しくできた言葉は「やさしい日本語」ではないと思います。しかし，そうした語を使うことで仲間意識や共感性が生じることもあり，コミュニケーションを円滑にする効果があることもありますので,「やさしい日本語」ではないとしても一概に否定できないと思います。

・「やさしい日本語」と国語教育の関係について、現行の教科書等でも別の形でこの活動は取り組まれているとのことですが、その場合学校現場でも「やさしい日本語」が目指している教える日本語ではないというような理解を設けるべきですか？

→［森氏］ちょっと質問の意図をつかみかねているのですが，学校教育でも「やさしい日本語」の考え方を意識的に共有することはあってもいいと思います。ただし，「やさしい日本語」という新しい考え方を導入したら万事解決という論調には懐疑的です。

・やさしい日本語の政策を実行したら、国語教育に対する影響があると思います。先生はどう思いますか。

→［森氏］影響はあると思います。ただし，目的次第だと思います。誰が誰に対して何のために「やさしい日本語」を使うのかという観点が必要です。独立した言語体系として「やさしい日本語」があるわけではなく，「やさしい日本語は，（日本語母語話者に限らず）人間一人一人の中にあるのだと思います。

・小学校教科書における「やさしい日本語」に関する取り組みが減っている原因がわかれば教えていただきたいです。

→［森氏］明示的に意識化されてないからだと思います。国語科ではこれまでも，結果として「やさしい日本語」の考え方に近い教材がありましたが，それは偶発

的とも言えます。「やさしい日本語」という考え方が重要だという意識が明確になれば，もっと増えるとは思います。

・積み上げ式での地域日本語教育は困難であるとお話しされていたが、その中での鮮烈なイメージを与える経験、与えられた経験について知ってみたい。また、イメージ化をはかる為の工夫について知りたいと思います。

→［森氏］あくまで何を鮮烈と捉えるかは個人次第なので，ある人にとっての鮮烈なイメージは，あなたにとっても鮮烈なイメージとは限りません。いままでの経験の中で「よく覚えていること」を思い出してみてください。それがあなたにとっての鮮烈なイメージです。

・興味深い話を聞かせていただき、本当にありがとうございました。漢語が多く、わかりにくいので、「やさしい日本語」ではないと仰いました。これは日本語の書き言葉の特徴ではないかと思う。やさしい日本語を実生活に生かすのは本当にいいことだと思いますが、書き言葉を話し言葉に変えると、書き言葉と話し言葉が一緒（同じ）になってしまうのではないかと思います。

→［森氏］中国語母語話者のような漢字圏の日本語学習者であれば，書き言葉に感じが多いのはむしろプラスです。また，書き言葉と話し言葉は異なる性質を持ちますので，書き言葉を「やさしい日本語」にしたら話し言葉になるわけではありません。

・おそらく私生活的な面で「やさしい日本語」が有効になると思うのですが、私生活的な面以外では。どのような手法が考えられるのでしょうか。

→［森氏］私生活に限らず，仕事や学校でも「やさしい日本語」は有効です。仕事というのは，チームの相互理解や，顧客への説明が不可欠です。「やさしい日本語」の理念である「相手の理解できる言葉で」という配慮は，その場合にも有効だと思います。

・方言やオノマトペは、日常生活ではよく使われると思うのですが、それらに対して森先生はどのように考えておられますか？

→［森氏］コミュニケーションは，その時，その場所，その状況でおこなわれるものです。方言やオノマトペが，その TPO にふさわしいものであり，相手に理解しやすく配慮されたものであれば，それは「やさしい日本語」と何も矛盾せずに共存するものだと思います。

●［第二部］参加者の感想とファシリテーター（横田和子氏）からのコメント

・詩を初めて作ったから、結局難しかったです。しかし、他者についての話を聞いたら、アイデアが流れてきました。たぶん、一番難しかったことは質問を聞いたときです。何が大事な情報がわかりませんでした。しかし、全部の情報を何とか詩に含めました。
・詩をつくるということを聞き、最初とても不安でした。小学生や中学生の頃から、詩をつくるという授業等に苦手意識をもっていたからです。しかし、実際行ってみると意外と自分はつくれるんだと驚くぐらい、すっと作ることが出来ました。理由を考えると、静かな時間があったのが良かったのかなと思いました。インタビューされたのをきくと、こーゆー風に詩をかいてくれたんだ！ととてもうれしかったし、感動がありました。たのしかったです。
・少し恥ずかしかったですが、面白い活動でした。自分の話が、相手の思考の中で変質し、別の表現、雰囲気をまとって詩として成立する体験というのは少し不思議な感覚でしたが、楽しかったです。
・難しいと思ってたけど何とか書くことができた。全体共有しないと思ってたから、共有するときいておどろいた。でもインタビューした人とは仲良くなれたのでよかったです。また、相手の方は外国の方だったので、新せんだった。
・インタビューで何を聞けばいいかわからなかった。詩をつくること事体の難しさもあると思うが、相手の話を聞いて、
・初めて会った相手と話し合いながら詩をつくっていくのはとても面白く楽しかった。詩の自由さを感じることもできた。
・人によって、テーマにおいているものが、物質的なものや心的なものなど、多岐にわたっていたのは面白かったです。心的なテーマから入ったものの方が、幅広い内容になっていくようにも思えました。
・「詩」って何っていわれるとイメージもできないくらい詩に対してキョーミがなかったが、以外とつくれるもんだなーって思いました。恥ずかしくて、でも、なんだかあったくて、嬉しい気持ちになりました。
・インタビューして相手を知った上で、詩を書くので、発表するのがはずかしい反面、考えるのは面白かった。相手の詩を聞いて、こんな風に考えて聞いてくれたのかと分かり、楽しかった。
・インタビューは難しかったです。する時もされる時もなかなかイメージがわいてきませんでした。しかし、創作はとても楽しかったです。まさにパートナーからたねをいただき、自分の中でいろんな想像がふくらみました。ことばをさがしたり、組みかえたり、とても楽しかったです。協動を実感できました。

・自分のことを、自分の表現でふくらませるのとはまた違い、自分が答えたことを相手の方の表現でふくらますというのは、とても面白い体験でした。
・自己表現、自己開示を初対面の方を相手にするのは久しぶりだった。未来の学級びらきにこの感覚を活かしていきたい。
・「そばに」という普段あまり考えるキッカケのないテーマについて考えた時、「そばに」ある物、いる人が自分との関わりにおいてどれほど大きな役割を担っているかということに気づくことができた。「そばに」いる、あるからこその心情や思いに焦点を当てることによって、「そばに」という言葉の持つ元々の意味だけでなく、そこに重層的に含まれる、日常生活の中からでは見ることのできないものを見ることができた。
・詩を書くということを久しぶりにすることができました。恥ずかしくていつの間にかしなくなった詩を書くということに、また触れることができて良かったです。「詩の身体」というのはとても心地良いものでした。
・「そばに、、、」というテーマでインタビューを行うことは難しかったが、こういう少しクサい内容だからこそ詩っぽくなるのかなと感じた。思った以上に詩人が多く、楽しく聞いたり、つくったりすることができた。
・最初相手の話をもとにして詩を作るなんて難しいと思ったが、やってみると面白かった。実際書き始めるとインタビューで聞いたことがパズルみたいにできた。他の人の詩、ペアの人の詩を聞くのは恥ずかしさもあったが、その人達のことを全てではないが知ることができて楽しかった。
・私たちがやっても難しいのに簡単に作るのことができるのはすごいなと思います。また、本ワークショップにはたくさんの外国籍の方がいらっしゃる中で生活語い以外の語いがでてきてすごいなと思いました。これを実際に児童や生徒に行うのは難しいと思うので、どのような手順や補助を行えば、することができるのだろうかと思いました。
・恥ずかしかったけど、楽しかった。日本語で詩を書くのは初めてだった。
・インタビューはとてもおもしろかったです。最初、ルールをあまりわかりませんでしたが、先生が私たちに説明してくれました。
・相手の話をもとに詩をつくるのは初めての経験だったのでむずかしかったです。テーマがテーマだけに少し気恥ずかしさがありました。
・おもしろかったけど書く時間が少し足りなかった。いろんな人の詩を聞けてよかった。もっとテーマをしぼっても、様々な作品ができそうと思った。
・インタビューから詩を広げる活動はとても楽しかったし、初めての経験だった。インタビューを通すことで、今まで無意識下にあったものの“気づき”にもなった。
・最初ちょっとはずかしかったけど詩を書きは楽しかった。

・６分間という短い時間だからこそ意外性が生まれるような詩になるのだと思います。詩を読（詠）むという経験はあまりありませんが経験がなくても美しい詩がたくさん生まれたのが面白いと感じます。知り合いとペアになっても面白そうだと感じました。他にどのようなトピックが書きやすいのか知りたいと感じました。
・「インタビュー」することがほとんど無いので、良い機会であった。「話す・聞く」に加えて「書く」という活動があり、大学生だけでなく、小・中学生にもさせてみたい取り組みであった。
・インタビューをもとに詩を作るのは初めてでしたが、楽しくとりくめました。自分で発表するのはとても恥ずかしかったのですがそれはそれで意味があるのかなと思ったりもしました。これは今回だからこそかもしれませんが。何人か知っている人もいたので、全く誰が書いたかわからないようにして読んでみたいとも思いました。
・テーマが難しかった。外国の方が創った作品が口語的で良かった。
・まずインタビューするのが楽しかった。ルーマニアからの留学生であったが、テーマがあったのでしっかりインタビューできたと思う。詩を作る段階も非常に楽しかった。自分の考えを自由に表現することの大切さを改めて認識した。教育以前に人として大切だと思った。発表は照れくさいものであった。しかし少しだけ悪くない物だと感じた。
・むずかしかったけど、意外と楽しかったです。
・テーマにそったインタビューをするのがむずかしかったです。はじめてお話する方だったので、どこまできいていいのかなぁと思ったりしたのですが、好きな物が一緒だったりすると、その物について話したい！と思いました。今回は時間制限があるので、テーマからずれないように意識してインタビューしたので、もっとふみこんだインタビューをしていくと、詩の雰囲気をもしかしたらがらっとかわるのかなと思います。他の人の詩をきいているとき、どんなお話しをしてたのかなぁとワクワクしました。
・「そばに、、、」というテーマもあり、あたたかい詩が多くなごやかな空気が会場に流れていたように思います。出来上がった作品は、先生がおっしゃっていたとおり、自分の個性が出ているなと、読み返して思いました。
・初めてインタビュー詩を書きました。私にとって、新鮮な体験でした。みんなは面白い詩とか、感動的な詩とかを書きました。みんなの詩を聞いた後、勉強になりました。
・インタビューした時は楽しかったです。最初は何が聞いていいかなぜんぜんわからなくても、河本さんのおかげで、会話が続けることができました。でも、発表の時は恥ずかしかったです。
・「そばに、、、」という１つのテーマでもいろいろな詩ができて、それを共有することで、いろいろな生き方や考えかたが知れて面白かった。自分の話したことが素敵な詩にな

ってとても嬉しかった。

・詩のかきかたがわからずまよいました。インタビューの内容をまとめているうちにどこをポイントにすべきかわかり、インタビューの内容はかなりかえてしまいましたが、まとまった詩はかけたと思います。

・とても楽しい内容でした。自分らしさを理解し、それを出せたらもっと楽しかったろうなぁと思いました。

・相手から聞いた話を一つの詩にまとめることは本当に難しいと思います。相手の気持ちを読み取ることも、気持ちを相手に伝えることも難しいと思います。普段、俳句を作ったりはします。自分の気持ちを１７字にまとめるのは工夫しないといけないことだと思います。これからも頑張っていい句を工夫していきたいと思います。

・初対面の、しかも海外からきた人にインタビューをして詩をつくるのは緊張したし、すごく照れくさかった。でも、型にはまらない作品ができて楽しかったです。

・詩の創作は楽しかったけれど発表は嫌でした。せめて４人ぐらいでの発表だったらまだ気が楽でしたけど、２０人の前での発表、しかもその後、全体で発表をする作品を選ぶというのは自由にせっかく表現したのに、「自由に書かなきゃ良かった。」と書いたことを後悔しました。せめて発表するかしないかを選べたら良かったのにと思いました。

・２人で話してみると、インタビューというより対話になったのが面白かったです。

・活動を通して、話したことのない人とたくさん話ができました。「詩をつくる」という目的があるので、詩の素材になりそうなことをどんどん相手に聞こうと思えました。「この方法なら必ず詩が作れます」と言われて、いきなりインタビューに入り、いきなり詩を作ったのでできるか不安でしたが、インタビューで聞いた素材があったので、それをつなぎあわせてなんとか形にでき、ほっとしました。

・相手のことを聞いて、いろいろ勉強になりました。

・最初は難しい活動だなと思っていたが、やってみるととても面白い活動だった。インタビューをすると、その人の知らないところがたくさん知ることができて、仲を深めるのにも良い活動だと感じた。

・様々な要素が詰まった活動だと思った。国語科の領域では、三領域のすべてが含まれていると思った。活動を体験して非常に楽しかった。インタビューの時間は、体験すると短く感じたが、短いからこそ詩に想像性・創造性があらわれると思った。

・今まで体験したことのない活動で、全てが新鮮でした。自分の考えや、ぽっと出た断片的なワードが聞き手の方の手によってつながっていく過程に大変驚きを覚えると共に、“詩”という形態を取ることによって、個人情報等への対応にもなるのか、とも感じました。

・詩を作るワークショップと聞いて、とっつきにくいな、難しいなと感じていたが思っていたよりスラスラ書けた。自分が話した内容なのに作品を聞くと自分のことじゃないような変な感覚になった。
・同じテーマでも全然ちがう雰囲気の詩ができていて、とても面白かったです。皆さん上手でびっくりしました。
・詩を作るイメージがわかず、インタビューのときはとても困りました。（インタビューの前に考える時間がほしかったです。）最初はまったくイメージできませんでしたが、作っていくうちにイメージをふくらませ、どんどんかくのが楽しくなっていきました。相手の意見をきいて、自分の意見も深まった感じがしました。
・留学生の書いた詩が、日本人とは違う視点から作られていてとても面白かった。「そばに」というテーマも、留学生にとっては特別な意味を持っていたようだった。
・インタビュー詩の実践活動はとてもおもしろく取り組むことができた。しかし、この活動にどんな意義があるのか、もう少し詳しくご教示願いたかった。特に今回のシンポジウムでの、この活動の意義はどこにあったのか。活動とグローバル人材の関連を知りたい。たとえば学校教育に持ち込むとき、どのような工夫が必要なのか。
・おもしろい詩をたくさん聞きました。
・詩をつくるということ自体がとても新鮮でたのしかった。発表することは、自分の言葉を伝えることになってとても恥ずかしかった。
・テーマがあったので、インタビューがしやすく、話が弾みました。自分だけで詩の「タネ」を考えるのは難しいですが、インタビューをして他者の話から作るという方法はとても面白いと思いました。また、詩は形式があると思っていたのですが、自由に書いてよかったので、きもとが表現しやすいと感じました。ペアの人が書いてくれたものは、私が答えたものが１つの流れになって、詩として成立していて、とても不思議な感じがして、うれしかったです。また、自分では考えつかないような表現をしてくれていて、おもしろかったです。
・質問に答えるという活動だけでこんなにステキな詩ができていくということがとても不思議でした。普段の人との会話では生まれない、心の中の気持ちが表われているような詩が多くて、私もペア―の人が作った詩を聞いて恥ずかしかったです。
・難しいものではあったが楽しかったです。
・インタビューをしている時はこれで詩が書けるのかと不安でしたが、答えから色々想像して詩を創作するのは楽しかったです。
・インタビュー詩を創るのはこれで２回目でした。初めての時は「自己紹介」というテーマで行いましたが、今回は「そばに、、、」という全くちがうテーマだったのでおもしろかったです。

・インタビューというものに慣れていないせいかなかなか情報を聞き出せなかったです。時間のあるときはアイスブレイキング等を増やされるのでしょうか？インタビューではなく、ただ対話を重ねて詩を書くというのもおもしろいと思いました。
・それはとても面白くて。良い経験だと思います。人と話して、本当に興味を持っている話しが出来て、会話が進んでいると、楽しいです。他の人の詩を聞いて、感動することや、笑えることが聞けました。
・初めは難しいテーマだと思ったが、日本語を母語としていない留学生でも短い時間で作れて良い活動だと思った。
・楽しかったです。

・この活動にどんな意義があるのか、もう少し詳しくご教示願いたかった。特に今回のシンポジウムでのこの活動の意義はどこにあったのか。活動とグローバル人材の関連を知りたい。たとえば学校教育に持ち込むときどのような工夫が必要なのか。

→［横田氏］この活動の基本にあるのは相互「インタビュー」です。inter-view は「間を見る」ことです。対話の最中に浮かび上がった「間」にことばが与えられて、それが詩という形になることが、この活動の大きな特色です。齋藤（2000）は、人間が生きるにあたり、「誰かに話を聞いてもらった」経験、自分の「存在が無視されない」経験が不可欠であるといい、更に、聴く、語る経験を繰り返すことで、人々は公共圏・親密圏を形成するといいます。今回、できる限り知らないひと同士でペアを組んでもらいました。それはごくささやかではあるのですが、繰り返し行うことで、公共圏・親密圏の形成に、あるいはそこに直結しないまでも、その必要性への気づきにつながっていくのではないか、という希望を持っています（普段、自分は聞いているか？あるいは聞いてもらっているか？という問いかけを持つことを含めて）。なお、ここでの、「グローバル人材」とは、voice（声、発言権）を奪わない社会を作れる人、作ろうとする人、そのために行動する人を意味しています。　グローバル化する社会にとっての言語教育、言語を用いる教育活動は、声を奪わない社会を作っていくために、極めて重要だと考えます。そして、この活動はその方向性にとって、ささやかながら意味を持っていると考えます。

学校教育で行うときは、あまり固く考えすぎないことが重要ではないかと思います。例えばテーマの設定方法も、今回は時間の都合上、テーマをこちらで事前に用意してしまいました（「そばに」）が、少し重かったかもしれません。普段は、参加者に今一番関心のあることを問いかけ、そこからテーマを出してもらうことがほとんどです。これまで私が出会ったテーマで面白かったのは、「クセ」です。ある参

加者が「クセ」に興味があると言ったからです。いったい、なぜ一番の関心が「クセ」なのか、アイデアを出した人に改めて説明は求めませんでしたが、その日は「クセ」詩がたくさん生まれました。この詩作の手法「こたね」考案者で詩人の上田假奈代さんと NPO ココルームの書籍や報告書にも、「かばんの中身」「部屋の間取り」など、たくさんのテーマがでていますので参考にしてみてください。身近で素朴なテーマの方が、意外性のある詩が生まれるのではないかと個人的には思います。

また、ココルームの場合と違い、学校教育ではつい、「やる」ことが前提になってしまいます。しかし、やらない自由もどこかで担保しながら、まずは「聞くだけ」の参加も受け入れるなどの工夫が必要になるかと思います。とはいえ、やらない自由もあります、と先にガイドしまうのは、私はパターナリスティックな匂いがして好きではありません。そうではなくて、もしも自発的にやらない参加者がいた場合に、まずは「聞くだけ」の参加なのだと受け止めることが大事だと思います。また、インタビュー時間や制作時間も、人数との兼ね合いを見て、伸ばしたり縮めたりしながら、臨機応変にやっています。

また、中には日本語を母語としない参加者もいると思いますが、まずは「詩」を嫌いになってもらわないことが大事だと思います。むしろ、今のその人にしかできない表現なのだと受け止めながら、アートとして捉えることが大事だと思います。例えば「帰る」という字を書こうとして、「へん」は正しいのに、「作り」の部分が「場」という文字の「作り」になっていた参加者がいました。「場所に帰る」という新しい漢字として、あってもいいね、と一回受け止めてから、正しい漢字を教えはします。ただし、作品を修正するかしないかは、本人が決定します。新しい漢字を創造してはいけない、というルールはないからです。こんなワンクッションがあるだけで、詩の自由さ、文字の自由さを味わい、反射的な修正や暗記ではなく、漢字の構造や、新しい漢字を創作したことを面白がりつつ、学んでいけるのではないかと思います。とにかく、書くこと、詩を嫌いになってしまわれては、元も子もありません。

詩は、イメージの遊びですから、日本語ネイティヴであっても、ある一つの詩を100%理解するなんてことは難しいわけです。作者本人にすら、説明できないことがあるのが詩だと思います。グローバル人材は、他者を 100%わかろうとも、わかることができるとも思わないけれど、わかろうとすることをあきらめない人だと思います。そして、他者を 1%しかわからなくても、恐れず、排除せず、共に何かをできる人だろうと思います。特に、これから社会の多言語多文化化が進めば、分かり合えないことが前提になっていきます。そのような不完全な理解の中で、一緒に居られる、共に何かを作れる、そのような実感を積み重ねつつ、自分も気づかなかっ

た自分の力が引き出されるという経験を味わうのに、この活動は適しているのではないかと思います。

・これを実際に児童や生徒に行うのは難しいと思うので、どのような手順や補助を行えば、することができるのだろうかと思いました。

→［横田氏］これまで私が学校で行ったことがある対象は、中学生・大学生・社会人です。残念ながら、まだ小学生には実践したことがありません。ただ、上述の考案者の詩人の上田假奈代さんの実践には、小学生も参加していますし、私が教員免許講習で行なった時、現役の小学校の先生方が子供にもやってみたいと張り切っていました。国語の教科書に詩はありますから、そうした授業をきっかけにしたり、時には歴史の授業、あるいは学校行事の後などでも、使おうと思えば使えると思います。手順は、本報告書のプレゼンの記録（33-35ｐ）を見ていただきたいと思いますが、学校でやる以上、基本、進行役はアウェイなのだという感覚で話しています。つまり、思春期の手前あたりから、多くの人が抱く感情、（詩を書くなんて嫌だ、無理、恥ずかしい、できない）そういう思いをまず最初に確認しています。これは、学校外のケースと学校教育とで違うところです。でも、その自分の「書けない」「無理」の枠が１時間もすると外れてしまい、「自分にも書けた」という驚きに変わり、互いの詩の良さを味わいながら、もっとこんな風に書けばよかった、詩って悪くないな、と思ってもらえると思います。発表時間の、発表者の表情（とりわけ、詩を書いてもらった方）は、味わい深いものがあります。できれば事前に何度か体験してみると良いと思います。特に NPO ココルームの実践はおすすめです。

参考文献

齋藤純一（2000）『公共性』岩波書店

●講演・シンポジウム全体の感想

・「日本に観光客として来る外国人は、言葉の違いも一つの楽しみとして来られている」ということを前に聞いたことがあります。なので、森先生が「英語ではなく日本語で対応するのも一つの方法」をおっしゃっていたのは、その通りだと思い、印象的でした。

・「やさしい日本語」についてわかりやすくお話しして頂けたので、理解しやすかったです。ありがとうございました。

・日本語は書き言葉、話し言葉に加え、敬語もあるため複雑な言語であることは間違いない。TPO に応じて使い分けるためには学校現場においても、扱われるべきなのかもしれない。

「比喩・検討」を用いた例がとてもわかりやすく、印象に残りました。
難しい語句を避けるのではなく、言い換えを行うことで新たに語彙の獲得ができるようにすることが大切だということが分かりました。

・「やさしい日本語」の役割や学校現場やボランティア等における位置づけの違いが良く分かりました。また最後の質疑において、私生活的な面でより有効である手法であると感じました。

・「やさしい日本語」が外国人をバカにしているのではなく、最低限必要な日本語の習得で有り、その習得を基にさらに日本語を深めることができるということが重要だと感じた。この話は、外国人の方や小学生などだけでなく、特別なニーズを持つ方にも有効な手立てだと感じた。

・学校教育では交流ばかりを教えてしまうが、ボランティアは交流ではなく、生活で使えるリアルな情報を伝えるのが武器だという話にボランティアの役割を理解することができました。また、「文法」より「話す」というのは高校の英語の授業形式と同じだったので分かりやすい内容でした。文法ばかりで説明するのではなく、まず「話してみる」ことが大切だと思いました。

・自分の当たり前だと思っていることが、誰にとっても当たり前ではないということを、いかにして教授するのかということの難しさを感じることが出来た。
言葉の使い方だけではなく、言葉に含まれる意味や裏付けについても学びの場を作っていくべきであると実感した。

・言葉についてもう一度しっかりと考え直そうと思いました。

・やさしい日本語の実現は外国人日本語学習者にとても、日本在住の方々にもとても本当に有意義なことだと思います。やさしい気持ちを持って、やさしい日本語を伝えるのは一番ありがたいことだと思います。これからも日本語教師になります。学生にもやさしい日本語を伝えます。

・森先生のお話はとてもわかりやすく、楽しく聞かせていただきました。実際にボランティア教室でのお話もあって現場で起こっていることもよくわかりました。教員を目指す大学生、そしてボランティアに参加する可能性を持つ方々へのメッセージが込められていて、励みになったと思います。また実際に使用されている国語教科書で目指していた「やさしい日本語」のお話も興味深くうかがいました。

・言語についてあまり考える機会が今までなかったので、新しい学びになりました。
外国の方向けの日本語教材を見たのも初めてでした。

・教科書の移り変わりを見ることができて非常におもしろかったです。グローバル化の時代で多文化社会に生きる日本語母語話者の私が多文化の方の日本語を考えるのが非常に良かった。

・「やさしい日本語」という視点はとても勉強になりました。来年以降に教員になる身としては言い換えということについて単純な辞書的言い換えではなく、言語習得の機会を得ることである。

・とても楽しく聞かせて頂きました。来年から教員になっていく上で、どう言い換えられるかというのはとても難しい問題だと思います。人が分かりやすい（子どもが分かりやすい日本語）の選択を行っていきたいと思います。

・言葉のおきかえだけがやさしい日本語ではないというのが印象的で納得できました。相手によって言葉をかえることを今後もっと気をつけたいと感じました。

・ふだん使うからこそ、意識しない言葉を、意識して使っていこうと思いました。

・小学校教育と日本語教育を関連させてご講演くださり、来年度以降の自分自身の大きな参考になりました。大変興味深かったです。

話をした人　：　あっこ
話を書いた人：　えんぴつ

ずっと一緒はいやだから

いて欲しい時に　近くにいてね。
おもい　あさないように
ただ　たわいもないことを話すだけ
ずっと一緒じゃないから
たわいもない日に思いだして
知らない場所で　笑っているよ。

話をきいた人：ラウラさん
書いた人　：はなの

8000km先のそば

会いたい人は　近くにいない
時間を超えた　遠くにいる
大好きな音楽と作家の国に来たけれど
ひとりの夜は　しずかな　赤い屋根の村を　思い出す
私は楽しくやっているよ　と
~~思いは~~ 8000キロ先の　あの人に伝えたい
思いだすでも　そばにいるよ

そういうものに私はなりたい。

話をしてくれた人　みさと
話を聞いた人　げんき

つらいとき、そばにはいつもお母さんや
友達がいてくれた。それは毛布やマフラー
みたいに私を優しく包んでくれる。とても
安心できるものだ。

いつか私も、困っている人や泣いている人のそばに
防災グッズを持って寄りそってあげられる人に
なりたい。みんなを優しく包みこみ、安心感を
与えられるようになりたい。

語　ソウ
詩　たか

はじめての1人暮らし

つかれて学校から帰ってきて
こんな時、お母さんがいたらなぁと思った
おかずをかたかに食べた熱々のお鍋
私の好きなものが全部入った。
お母さんの手作りお鍋
もう一度食べたいな
ぽっかり広いワンルームでひとり、
カップ麺の細い湯気をながめる

推し人　ジュリオ
持ち寄った人　まゆ

ジュリオの思い

いつもはだらしないのに
ケイタイ　音楽　時間
大事なものがつまってる

そばにいてほしい人
家族　友人　恋人
私に人生を教えた思い出

そばにいるということ
うれしい　たのしい
かなしい　くるしい
大事なものをわかちあうこと

しあわせ

話をした人　みほ
詩にかいた人　あゆ

他愛もない話をしている時
いっしょに笑ってくれる時
楽しいことをいっしょに喜んでくれる時
失敗も笑って励ましてくれる時
大好きなチョコレートを食べている時
並んでテレビを見ている時
そばにいてくれてありがとう
ひとりじゃないって教えてくれてありがとう

私の宝ものにしてほしい手紙

昔、遠い国から想像の物は中国に移入されました。
あの落ち物はハーブの香りだし、金属で作ったし、中にお水を入れると乳と変化
あたためられて。
何故？魔法じゃないの？
熱で、いつもあたたかいです。
「印籠」と言います。

作者：モミジ
ペア：おかね

→

わたしの世界

話をした人：あすか
詩にかいた人：ふゆは

ひとりはいい　人目を気にしなくてもいい
だれもいない　わたしの世界
ひとりはいい　すきに動ける
交差点だらけの　わたしの世界

もうだったはずなのに

ひとりは苦しい　足が動かない
だれもいない　わたしの世界
ひとりは苦しい　考えたくない
行き止まりだらけの　わたしの世界

でもね
わたしの心を言葉に映してくれる人
知らぬ間にばんもうこうをはってくれる人
案内板をたててくれる人　道はどんどんできていく

わたしの世界は水色に　きらきら光る水色に

友

気づけば　いつでも　友である
たとえ遠くに離れても
会えば　いつでも　友となる
楽しいときも　苦しいときも　あるけれど
それでも　いつも　共にある

話をした人　ウメダさん
話を聴いた人　イワサ

わたしのそばには

話をした人　えソ
話を聴いた人　ないちゃん

はながヨリだから、ティーシャ。
お仕事のための、ケータイ。
それから、お財布。
これだけあればいい。

ごめ、お母さんがそれたら
もっといい。
夜中に会いたいなんも。
それから、それから……。

タイトル
「そばの好きな ネコ」 作詩

★話をした人：のぶよ
■詩を書いた人：まいー

だきしめたら ふわっとして

でも ふたんは キリッとしてる

嫌いなものは うるさいこどもで

好きなものは 静かな おいしさん

ごま人様が 来るようなので

今日は 優しい 思っあげようかと 顔をのぞきこんだら

「じゃーは 良いねふわふわで」だって

だったら ごま人様も ねこいなかったら 良いのいね。

僕の思い出

話をした人 5さん
詩を書いた人 3

小さい頃 僕のそばにはグローブが
野球道具は、僕の
でも 今の僕の前に ヨハンコンが....
思い入れがいっぱいの道具
小さい頃から今まで、色んな道具が僕にあった
でも、いつでも僕のそばにあるのは
思い出っぱいの野球道具

たたかう カタツムリ

話し手 Yさん
作者 M.

今、私はどこにいるのかな？
今、私はどこに向かっているのかな？
ゴールまであとどのくらいだろう？
私に見えるのは目の前の小さな世界…

雨が降っても大丈夫
風がふいても大丈夫
私を守ってくれる場所があるから
ほっとできる場所があるから

うん、きっとこの先には、すてきな世界が待っている！
私にもひろーい世界が見えるはず！

テーマ：私のたからもの

話をした人：Iさん
詩を書いた人：Sさん

私のたからもの
それは、いつも私のことを分かってくれる
それは、いつも私をいやしてくれる

私のたからもの
それは、いつも私を私らしくいさせてくれる
それは、いつも私のことを見守ってくれている

私のたからもの
それは、いつでも側に居てほしいと思える
何もしなくても、一緒に居るだけで幸せな気持ちになれる

それが、私のたからもの
他の誰のものでもない
私だけの、自慢のたからもの

ある日、そばにいなくても

ある日、そばにいなくても、
その愛しが残る。
私、へびを飼っている。
へびの泳ぎ方を見て
癒される。
私、古本屋のにおいが好き。
本棚を一つ一つ眺めて
癒される。
私、今、彼女がそばにいる。
彼女の笑顔を見て
癒される。
ある日、
そのへびがいなくなっても、
古本屋が引越しても、
彼女と別れても、
その愛しが少しと残っている。
指先の暖かさがその思出を語っている。

書き手：雨
インタービューを受けた人：雪

故郷からの手紙

田舎に住むわたしの
ちょっぱ
読んでください

お祝い
贈り物
伝統衣装のイヤモノ等

そして
品質
最高
読んだけど

9000円

そこで
ここから
ここ

ルーマニアの
ああ

話聞いたと　テ
話書いたと　こに

幸あれ。

イニシエーションした人　利田さん

⑩もっかい

真夜中のホットミルクのような空うごを
その表情はたたえていた。
その手色は浮かべていた。
その仕草面は示していた。
あなたが人知れず泣くころに
「ぜんぜんだいじょうぶだよ」と
誰かが笑うだけで
どんなにすくわれる。
どんなにすくわれる。

そばにいてほしい

落ちた人：はなの
涙を拭いたい：うみか

夜になると、
部屋にもう一回
一人で泣いてしまった。
誰さえいない、
なにも考えず、
好きなだけ夢に浸ってて…

あいたいはずっと
あの人に伝えてあげたい、
あの人は一緒だったら、
笑顔が増えるから、

私は私のこの人生、
あの人の人生
ねぇ分かってよ
明日明日って言ってもね、
わたしもいつか
みんなにだいたい
たいせつなあの人のそばに、
ちゃんと言えていえるから
ずっと。

そばにいてほしい人

詩作：りこうか
作者：とおる

そばにいてほしい人
それは海の向こうにいる人
それは年のはなれた弟
そばにいてほしい人
ちょっとおくびょうな男の子
私と同じで本が好き
いつも物語を読んであげた
でも今は海の向こう

そばにいてほしい人
今は何をしているだろう
大きくなっているかな
元気にしているかな
今でも本を読んでいるかな

そばにいてほしい　私の弟

そばにいてほしい人

初めて出会ったのは十年前かな
日本に来てから　五ヶ月ぶりだなあ
その友達は　元気だろうか
二人で見てたオベラは　今も見ているか
隣に私がないと　寂しいかな
ここの日々を　話したいが
ここから帰って　話そうかな
オベラを見ながら　次の年へ
待っていてね　約束だなあ
小春日や　友達いなき　奈良の町
作者：あかね
ペア：モミジ

[清書]

タイトル「そばにいる。」

話した人　あやさん
話をかいた人　かな

そばにいるということ。
それは安心感をあげられる。
それは一人じゃないよと教えてあげられる。
何も言葉にしなくてもただとなりにいるだけで。

嫌なことがあったとき、くちが言いたいとき
周りにいる人たちは、そばにいてずっと
話を聞いてくれる。なぐさめの言葉をかけ
たり、責めたりしない。ただそばにいてくれる。

だから私も、大切な誰かが弱っているとき
何も言葉にせずただその人のそばにいてあげ
たい。安心感をもってもらいたい。一人じゃないよ
と教えてあげたい。
私がそうしてもらってきたように。

タイトル　“いつもの”

詩をはこく：セナ
詩をさいたく：のり

ひとりの時間　いつもの場所
聞こえるのは　誰かの声　ぬくもり

ひとりの時間　いつもの場所
そばにあるのは　精ぎれた紙　目の前の山

ひとりの時間　いつもの場所
聞こえてくるのは　鳴る音　鳴られる音

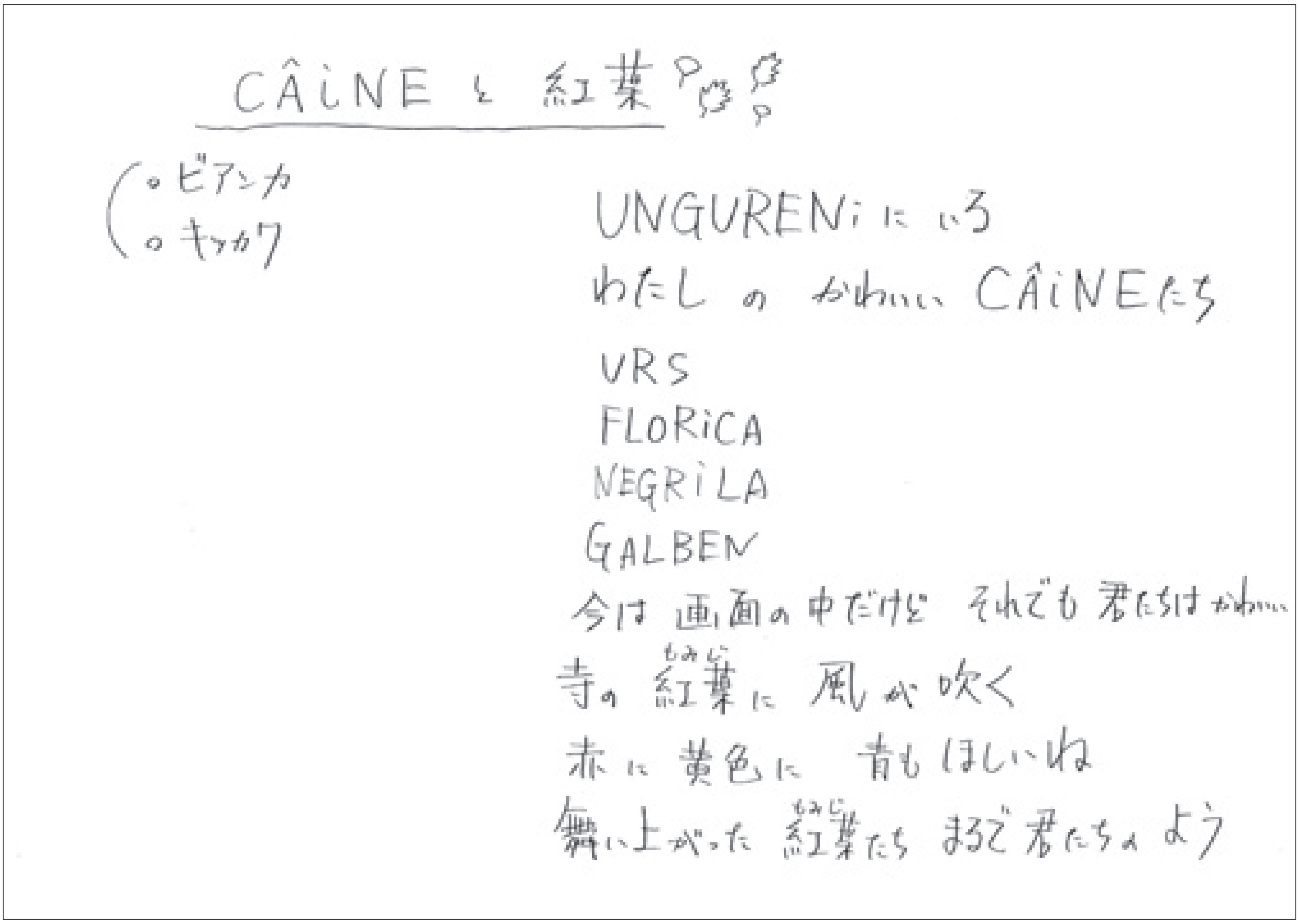
ひとりの時間　いつもの場所
感じるのは　そばにある　大切なもの　いつもの自分

あたりまえ

けり－
まっちゃん

きっかけは　おんなじ　わのなかに。
きっかけは　ぼくの　すぐ近く。
きっかけは　ぼくの　すぐ~~まえ~~そばに。

いつも　いっしょで　忘れた。
いっしょで　“ふつう”と　思ってた。
“あたりまえ”　に　ありがとう


CÂiNE と 紅葉
○ビアンカ
○キッカワ
UNGURENi に いる
わたし の かわいい CÂiNEたち
VRS
FLORiCA
NEGRiLA
GALBEN
今は 画面の中だけど それでも君たちはかわいい
寺の 紅葉に 風が吹く
赤に 黄色に 青もほしいね
舞い上がった 紅葉たち まるで君たちのよう

わたしの すきなもの
いま あるものに たすけられて
でも むかしからあるものだって だいすきなんだ
きらきら きらきら てのなかで かがやく
ほわほわ ほわほわ つつまれて
どちらも すてき どちらも たいせつ
そんな わたしの すきなもの

いつもそばにはギターがある

インタビューした人　ラクさん
詩をつくった人　はるか

ぼくはフランスから来た
いつもいっしょだったギターはいっしょに来なかった

日本に来てやっぱりギターを買った
ぼくの新しいエレキギター

好きなメタルをギターでひく
フランスにも日本にも好きなメタルバンドがある

フランスでいつもそばにギターがあった
日本でもいつもそばにギターがある

いつもそばにはギターがある

タイトル：そばにいてほしいひと
話した人：デオちゃん
詩を書いた人：シュウ

そばにいてほしいひとはベティー
ベティーは一番仲良い親友だ
今はそばにいない
国にいた時ベティーとたくさん遊んだ
今のベティーは何しているのだろう
今のベティーはご飯をちゃん食べているのだろう
今のベティーは元気にしているのだろう
思い出ばかり…
一番好きなのはベティーと一緒に散歩することだ
~~そうベティーは人間ではなくいぬだ~~
~~ひひえ~~
そう
ベティーは人間ではなくいぬだ
ひひえ
ベティーはいぬではなく親友だ

ペダルの いえて

ペダルに をいう ペダルが あって

ペダルが

ペダルの ペダルの

ペダルの ペダルの ペダルの ペダルの

ペダルの いえて

インタビュー した人　寺島さん
録音 ボード 人　村田

誰

詩を書いた人　ほ、み
詩を読んだ人　ななこ

今までずっとそばにいてくれた父と母
何でも言えた 弱い所も見せられてた 受け入れてくれた
でももうそばにはいてほしくない
今そばにいてほしい友人
何でも言える 弱い所も見せられる 受け入れてくれる
でもいつかそばにいてほしくなくなるかもしれない
そばにいてくれたのに
そばにいてほしいのに
もういらない いやだ 離れたい なんて
そんな風に僕を変えさせるのは
一体誰だ

タイトル　自転車
話した人　まがわ
詩を書いた人　ソウ

高校の入学プレゼントとして
父から自転車をもらった
土休日の1年間もずっとそばにいる
雨にも負けず
風にも負けず
雪にも夏の暑さにも負けず
丈夫な体を持ち
毎日朝自転車に乗って学校へ行く
一人で寂しいけど
自転車がそばにいて寂しくなくなる
毎日疲れた顔で家へ帰る
一人で寂しくこわいけど
自転車がそばにいて安心できる
これまでの1年間ずっとそばにいてくれて ありがとう
これからの何年間も続けてそばにいてね
よろしくね
私の自転車

大切な人

話した人：えんぴつ
詩を書いた人：あっこ

そばにいたいのは、お互いのことを考え合える相手。
しばらく会えなくても「頑張ってるんだな」って思える
相手を信じてるから、本当に大切だから そう言える

周りにいやしがあれば、趣味があれば、
少しくらい1人でも大丈夫
頑張ってる って知ってるよ
でもずっといないのは困るから、それは分かってね。

"泣いてもいいかな"

話した人　あゆ
詩を書いた人　みほ。

しんどい時、誰かがそばにいてくれると、安心しちゃう

そばで泣いてもいいかな

でも、イライラしている時、誰もそばにいてほしくない

1人で泣いてもいいかな

そばにいるってことは よりそう ってことだから、誰かがそばにいてもいなくても

何とかわずに　泣いてもいいんだよ。

駅が嫌い

詩した人　のり
作者　七十

わたしは駅が好きじゃない　だって聞きたくない音がたくさん聞こえてくるから

ドタドタドタ　急いで階段を降りる人　もっと落ちついてよ
ケション　外の寒さにくしゃみする人　ちゃんと防寒してくればよかったのに
次から次と　勝手に耳に入ってくる音　こんなの暴力だよ　マジムカツク

だから早くしなさいって言ったじゃない
寒くなるわよ　マフラーして行きなさい

（こっかあともや）
文学の人

大阪には
文学が好きな人は
フィクションの本を読んだり、
ギターを弾きながら、昔の歌を歌ったりする
だれかた
村上の人物や
詞華集（しかしゅう）の貴人（きじん）でしょう

インタビューされた人　西田さん
インタビューした人　武田

タイトル：大切な人のまなざし

「だれかのまなざしにいるとはどういうことだろう。」
窓の外を眺めながら物思いにふけっている僕は、ふと考えた。
家族、友達、恋人、僕のまわりにはたくさん大切な人はいるけれど、
その人のまなざしにいるって、何だろう。
きっともそれは、ただ一緒にいるだけで楽しくなったり、ほっぷ時のべやすらぎだけじゃなくて、
ただ、隣にいるだけで、笑ったり、怒ったりできること。
ただ一緒にいるだけなのに、もっと一緒にいたいと思うこと。
大切な人の横を浮かべながら考えた。
僕も、まなざしでいたい。

そばにいるということ

話をした人：ふみほさん
詩を書いた人：あすか

そばにいるということ
しんどいとき
はげましてくれること
応援のことばをかけてくれること
話を聞いてくれること
でも それだけじゃなくて
同じ瞬間に
一緒に頑張ること
その存在のおかげで
自分も頑張ろうと思えること
それが
そばにいるということ

話を聞いた人 Kさん
詩を書いた人 V

「今そばにあるもの」

今 私に必要なもの
それは 自分が自由に使える時間と
いつも身のまわりにあるもの
そして何より いつも身のまわりにいてくれる人
今の私がいて、そばに何かが欲しいと願うことができるのも
いつも身のまわりにいてくれる人のおかげ
つまり、今そばにあるものが
ずっと 私に必要なもの

書いた人：藤田　知久
聞いた人：成田さん

珈琲

朝の目覚めにコーヒーを
大きい大きいカップで。
苦味だけの味を
今となってはおもっている。

紙気覚ましにコーヒーを
少し苦めのコーヒーを
熱で焼けるコーヒーを

変わらない人

聞き手：宮島さん
書いた人：えり

そばにいてほしい人は負担だね
会いたいときに会えないから
会っても　ときにはけんかするから
会ったら　今も変わっていたりするから
でも　まはちがう
会いたいときはいつでも会えると
会うと　いつも楽しくなる
いつまでも変わらずのび助を
してくれる
そばにいて変わらないから安心だよ。
ずっとそばにいてほしい

先生に…

インタビューしたい人　しまもさん
インタビューできた人　くるかわさん

わたしは　楽しいとき　しんどいとき
いつもいてほしい
悲しいときも　楽しいときも　どこにでも
いてほしい
大切にしたいと思う
楽しいと　一緒にいたい
どこにでも　思ったときに
会いたい

読む人・辰巳太郎
聞く人・藤田さん

インタビュー

聞いてると話したくなった
ぼくが聞いてばっかりは 訊問になっちゃいそうで。
聞かれていると聞き返したくなった
相手のことが知りたくなって。
藤田さんとのインタビュー
聞いてる時も 聞かれてる時も 楽しかった
これが正しいインタビューになってたのかはわからないけど(笑)
だって少し話しちゃったし 少し聞いちゃったから。

話をきいた人「Uさん」
詩を書く人「Kさん」

「まわりにいる人」

自分のまわりにいる人は
どんどん どんどん 変わっていく。
自分のまわりの環境も
ころころ ころころ 変わっていく。
ころころ どんどん 変わっていくけど
その つながりは 変わらない。

タイトル「大切な人」

インタビューを受ける人 : 雨
インタビューをした人 : 雪

そばにいた人が いなくなった
そばにいない時 いなくなった

もっとちかくに いたかった
もっといっしょに いたかった

あなたのために 頑張りたかった
あなたのために 生きたかった

それでも明日は やってくる
それでも明日は 希望に満ちている

そのことを教えてくれた そばにいた大切な人
大切にすることを教えてくれた そばにいた大切な人

だから私は 生きていく
身近な人たちこそ 感謝する
大切にして 生きていく。

そばにいたい

まっちゃん
17りのしん

わたしは　ずっと　まっている
かえりを　ずっと　まっている

じゅんの　はいはいで
いちばんに　かがえり　するの

でも　ほんとは

もっと　もっと　もっと　もっと
そばにいたい　　そばにいたい。

そばに…」　浜田さん　2回　幼年期

インタビュー　したん　黒川
インタビュー　させん人　浜田さん

「そばに」

私の「そば」には　なぜ　まえ　いる
いつも「そば」には
安心　がある
友達　がいる
ほっとする
いろいろ　ある
全部に　意味　ないこと
「安心」　ある　ときと　ない
私の「そば」には「安心」　がある　だ。

とっても
[illegible] → とこには
まんがく → [illegible] → [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible] →
[illegible]
魚、さしみ、パスタ
[illegible] → [illegible]
[illegible]
[illegible] → [illegible]
[illegible] [illegible]
京都[illegible]の通り [illegible]
確かに [illegible] [illegible]
もう過去に戻れないし、
想い出は[illegible]
一日[illegible]だけでの_____ 補[illegible]
[illegible] 野球チーム
[illegible]週 ___ 魚屋
[illegible]
食べたい [illegible] [illegible]
全部遠すぎて [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible]
[illegible]、[illegible]昔の生活の音楽が聞える
昔の生活の [illegible]

がよいつとめた

つにし
デオ

：：聞いた人 小西さん
書いた人 デオ

旅行

原爆が落ちました。
[illegible]が当時の
旅行がねたえ事。
アメリカに行ってり。
イタリアに行ってり。
台湾に[illegible]。
オーストラリアに行ってり。

計画を立て、
三人兄弟一緒に
旅行に行こう。
大事な人はそばにいる。

[illegible]取を書て、
自分の財布を持て、
海外で
楽しい旅行しましょう
[illegible]はそばにある。

大事なことは
ずっとそばにあるから
どこでも
いつでも
自分に楽しい時間を過ごしましょう

読む人 ：R・S
話を書いた人 ：M・K

そばにあるもの

詩をした人 [illegible]

詩を書いた人 [illegible]

私のそばにあるもの
私のそばにほしいもの
のちがある
さびわてタックス
シャバがでる
でも人ってどう思うが
私はいらない
私はどうだっが
人生はいらない
その感情はこのものなら
いらん捨てないけど
好き
その気持ちかしれない

詩を書いた人 [illegible]

詩をした人 [illegible]

そばにいてくれて ありがとう
そばにいてくれたお母さんに ありがとう
生んでくれて ありがとう
支援してくれて ありがとう
そばにいてくれた先生に ありがとう
詩をしただけで うれしい
恋にならってないけれど
いつもそばにいてくれて ありがとう

色

詩をした人 [illegible]

書いた人 [illegible]

そばにあってほしい色
[illegible]
あたたかい感じがするから。

そばにあってほしい色
[illegible]
落ち着く気がするから。

そばにあってほしい色
[illegible]
何色でしょうか。

宝物

話をした人　張 阿都さん
詩を書いた人　梅津 麻子

普段は 携帯が そばにある
いやなことは、映画をみて 忘れる

でも、本当に つらいとき、
そばにいてほしいのは お母さん

でも、本当は
そばにいてあげたいのも お母さん

お母さん、そして お兄ちゃん
一緒にいると 安心する

家族という　宝物

そばにあってほしいもの

話し手：とおる
作者：りこうか

大学の近くにアパートで一人暮らし、
冬になって部屋が寒い、
寝るときに暖かいお母がそばにあってほしい、
エアコンをつけて、温度が暖かい、
でも、電気料金が高い、
あぁ、ふるさとの兵庫県のほうがいい、
いま、暖かい布団がそばにあってほしい。

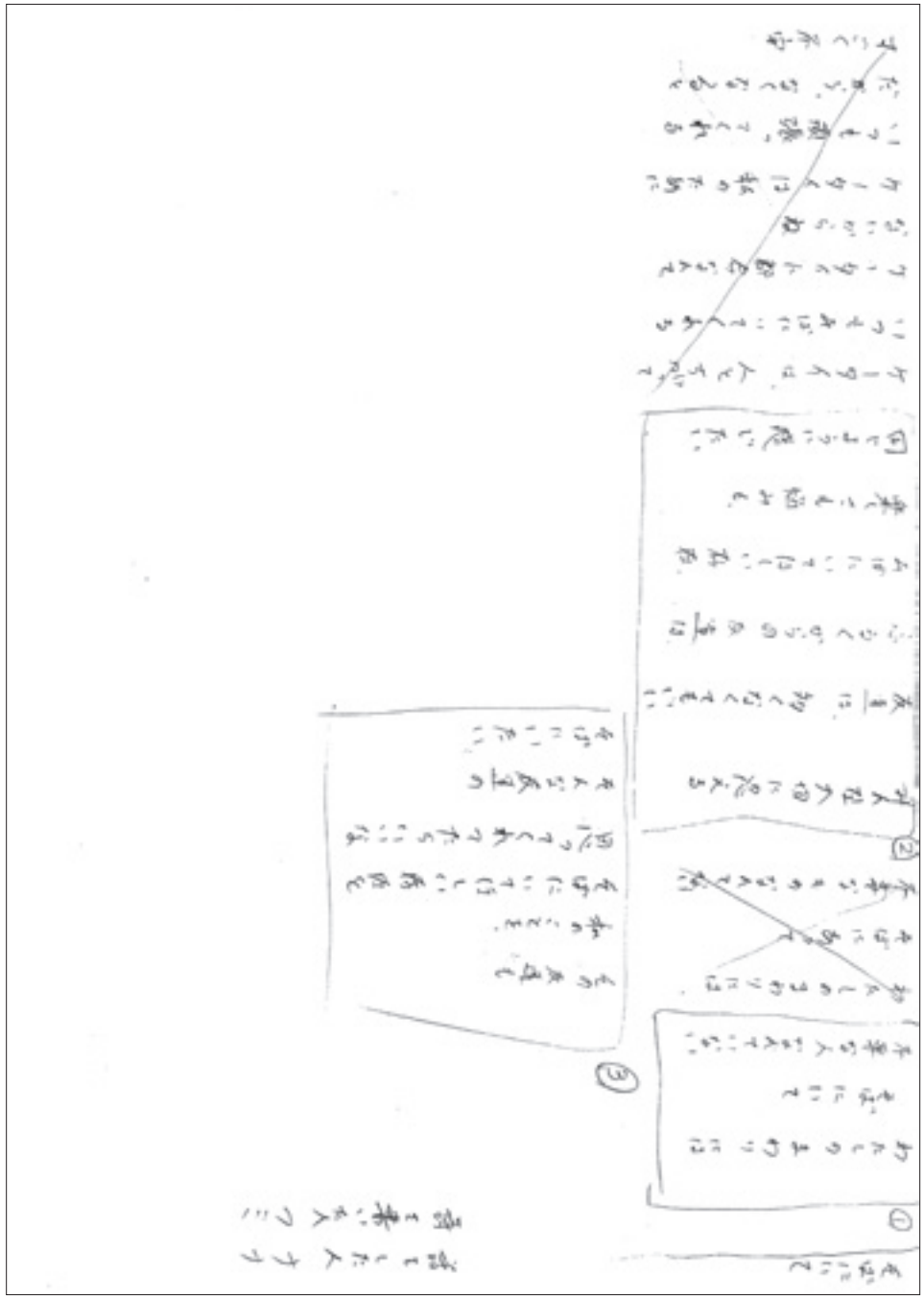
ギャップ

話をした人　ディライラー
詩を書いた人　けいご

そばにあるのは
たくさんのアクセサリー
きれいな色の髪

でも甘いものが大好きで
メロンのキャンディを持ち歩く

このギャップには気づかない
話してみないとわからない



そばにいてほしいもの

インタビューした人　日野さん
詩をうたった人　ラフ

わたしは　ねこがそばにいてほしい
だいすきだからいてほしい
いつも「ねこいたらいいなー」とかんがえる
今ねこがいないから、いてほしい
3歳から9歳までねこがいたが
ももちゃが生まれて、アレルギだったから
ねこはほかの家に上げられた
もう飼えないことになった。
一人ぐらしでも飼えるチャンスがない
飼っていいマンションがすくなすぎる
それに、ねこはずっと同じ所にいたがらない
引っ越しをたくさんするから、今飼わない方がいかも

「アルコール」

話を聞いた人　パパ
詩を書いた人　でん

わたしはアルコールがすきだ

アルコールが体にしみていく

それがたまらない

ビール、ワイン、日本酒、焼酎、
わたしはなんでもすきだ

のどごし、香り、味覚
全てがたまらない。
アルコールがあればなんでもよい。

あぁ、アルコール
あぁ、アルコール

奈良教育大学 国際交流留学センター主催 シンポジウム

平成29年度学長裁量経費プロジェクト

教員養成大学における グローバル人材育成を考える

学校教育現場における多文化化や外国語教育・異文化理解教育の変化といった社会的背景を受けて、教員養成大学における「グローバル人材」のあり方とその養成に関する検討が教員養成大学にとって重要な課題となっています。そこで奈良教育大学では、昨年度に引き続き、シンポジウム「教員養成大学におけるグローバル人材を考える」を開催いたします。
今年度は多文化社会における「ことば」をテーマに講演とワークショップを行います。

□ 日　　時／ 2017年12月9日（土）13:30～17:00（受付開始13:00）

□ 会　　場／ 奈良教育大学 大会議室（本部管理棟2階）

□ 参加対象／ 本学学生・教職員・一般の方　　参加料 無料

プログラム

［第一部］講演

「やさしい日本語」と学校教育

京都外国語大学　森 篤嗣

「やさしい日本語」とは，語彙や文法項目を制限し，多くの非母語話者が理解できるように工夫した日本語です。「やさしい日本語」が目指すのは，外国人だけに日本語習得を押しつけない，寄り添いあう地域社会像であり，「日本語母語話者と非母語話者の歩み寄り」です。講演の前半では，こうした「やさしい日本語」の理念や背景についてお話しします。ところで，「やさしい日本語」の理念そのものは，特別に新しい概念というわけではありません。「わかりやすく伝える」ということは，長年，学校教育や国語教育で取り組まれてきたことなのです。講演の後半では昭和27年使用開始以降の1,285冊の小学校教科書を調査した結果を例にしながら考えます。

講師紹介　森 篤嗣（もり あつし）

京都外国語大学外国語学部日本語学科教授
専門分野は日本語学、国語科教育、日本語教育。著書は『授業を変えるコトバとワザ―小学校教師のコミュニケーション実践』（2013年、くろしお出版）、『にほんごこれだけ1&2』（2010/2011年、ココ出版、共編著）、『日本語教育文法のための多様なアプローチ』（2011年、ひつじ書房、共編著）、『「やさしい日本語」は何を目指すか:　多文化共生社会を実現するために』（2013年、ココ出版、共編著）など多数。

［第二部］ワークショップ

インタビュー詩を創ろう

ファシリテーター／横田和子（目白大学）
和泉元千春（本学国際交流留学センター）

「インタビュー詩」は，他者との相互インタビューを通し，対話と協働によって詩を作っていく活動です。他者理解や人の話を聴くこと，表現することのレッスンも兼ねています。本ワークショップでは，留学生を含む文化や背景の異なる人同士の対話を通して，他者との「あいだ」を味わい，ことばの力を感じる体験をしてみましょう。

［お問い合わせ先］奈良教育大学 国際交流留学センター

［参加申し込み方法］お名前・ご住所・ご所属を明記の上、下記アドレスまたはお電話かFAXにてお申し込みください。
E-mail／kokusai_ryugaku@nara-edu.ac.jp　　電話・FAX／0742-27-9177

［申し込み締め切り］12月5日（火）

［後援］奈良県教育委員会、奈良市教育委員会（申請中）

平成29年度学長裁量経費プロジェクト
教員養成大学における「グローバル人材」育成のためのカリキュラムに関する総合的研究

奈良教育大学　国際交流留学センター主催　シンポジウム
平成29年度「教員養成大学におけるグローバル人材育成を考える」報告書

平成30年3月

国立大学法人　奈良教育大学国際交流留学センター
〒630-8528　奈良市高畑町
国際交流留学センター
TEL・FAX　0742-27-9177
電子メール　kokusai_ryugaku@nara-edu.ac.jp
URL　http://cies.nara-edu.ac.jp/